

台湾情報誌

交流

2014年5月 vol.878

公益財団法人 交流協会
Interchange Association, Japan

音楽で紡ぐ台湾と日本の縁



交 流

2014年5月
vol. 878

目次

CONTENTS

音楽で紡ぐ台湾と日本の縁 (馬場 克樹)	1
海外での市場開拓、展示会を有効に活用する方法 ブースレイアウト・掲示物の作り方、販促ツールの作り方 (吉村 章)	14
「人形劇をととした文化交流」実践報告 —愛知教育大学子ども向け人形劇サークル〈じゃんけんぼん〉 の活動から—	25

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。



音楽で紡ぐ台湾と日本の縁

シンガーソングライター 馬場 克樹

あなたは何になりたかったのか？：

「二十歳の頃のあなたは何になりたかったのですか。」

「それでは、六十歳になった時、あなたは何をしていたいのですか。」

2007年5月に交流協会台北事務所の文化室長として赴任した私が、台北で暮らし始めてから一年が過ぎた頃だったと記憶している。ある日、オーストラリアのシドニー在住の友人であり、私の兄貴分でもある作家の永淵閑さんが、自身のブログの中でこのように問いかけていた。閑さんのこの言葉は、ブログという性格上、不特定多数の読者に向けられたものであったはずなのだが、私にはそれが直接自分に向けられた問いかけのように感じられ、胸の奥深くまで突き刺さったのだった。

実は二十歳の頃の私は、大学のサークルで音楽バンドを組み、シンガーソングライターとしてデビューすることを夢見ていた。しかしながら、現実の私はと言えば、当時その登竜門であった全国規模の創作音楽コンテストに毎年応募しては、地方予選に辿り着く前にことごとく落選していた。やがて自分の才能に見切りをつけた私は、大学卒業と同時に就職をし、それから十数年間、音楽創作とは全く無縁の生活をする事となった。しかし、二十歳の頃の自分は、確かに歌手として華やかな舞台に立ちたいと願っていた。

それでは、六十歳になった自分は何をしていたいのだろうか。私は自問してみた。すると、小学校や養老院でギターの弾き語りをしている自分の

姿と楽しそうに自分の歌に耳を傾け、それを一緒に口ずさんでくれている子どもや老人たちの笑顔がふと脳裏に浮かんだのだった。それは柔らかな日だまりに包まれているような光景だった。

この瞬間、はたと気づいた。二十歳の頃の夢と六十歳になった時の夢は、一見性質が違っているようにも見えるが、大きな共通点もある。過去の自分も未来の自分も歌を歌っていたいと言っているのではないか。ならば、今この瞬間の自分も歌を歌えばいいではないか。そう決意してから間もなくすると、不思議なことに台湾の若いミュージシャンたちが、次から次へと私の目の前に現れた。その一年後には、「爸爸辦桌（注：台湾語でバババンドォと発音し、パパの宴会の意。英語のバンド名 Baba Band との掛詞。現在は活動休止中）」という四人編成のバンドを結成し、台北市内の「河岸留言（Riverside Music Café）」というライブハウスに定期的に出演するようになっていた。

読者の皆様に誤解の無いようお断りしておきたい。当時の私の音楽活動は、基本的に退勤後の夜九時以降からで、交流協会の職員という仕事柄、ライブ出演はノーギャラであった。また、「尾牙（ウエイヤー）」と呼ばれる忘年会の席で、私のバンドの演奏を聴いてくださった齋藤代表（当時）からも、「馬場君は職業を間違えたのではないか。これからも日台の音楽交流に励むように。」とのお墨付きをいただいた上でのことであった。

このバンドは、結成一年後の2010年には、台湾先住民アミ族のシンガーソングライターの舒米恩（suming）君と一緒に、台中や高雄への島内巡回ツアーを組んだり、沖縄国際アジア音楽祭やTEDxTaipei いった国際イベントにも出演したり



©Photo By Tony Lee

するようになった。なお、舒米恩 (suming) 君は、今では台湾最大の音楽賞である「金曲賞」の常連であり、2012年には「最優秀原住民歌手賞」も受賞している。

まさにこれからが期待された矢先であったが、私は三年半に及んだ交流協会台北事務所での任務を終え、2010年9月に台湾を離れることとなった。それでも私は「爸爸辦桌 (Baba Band)」のライブ出演のためだけに、自腹を切ってその後もほぼ二ヶ月に1回のペースで二年間台湾に通い続けた。そして、2012年8月末に、私は音楽家として身を立てる決心をし、再び台北に舞い戻ったのだった。五十歳を目前にした私が、どうしてそのような決断をするに至ったのか。その問いにお答えさせていただく前に、いったん時計を私の幼少期まで大きく巻き戻し、そもそも私と音楽が関わることとなったきっかけから話してみようと思う。

父の薫陶を受けた幼少期：

1963年に宮城県の仙台で生を受けた私は、生後一年経った翌年からほぼ十年間、父の仕事の都合により静岡県浜松というところで過ごした。幼

少期の記憶は、虫採り、魚釣り、草野球、ほぼそれだけと言っていいほどのまったくの自然児だった。こっそり白状すると、小学校一年生から二年生にかけての一年半ほどだけオルガンを習ったことがある。しかしながら、当時の私は「昆虫博士」のあだ名をいただくほどの無類の虫好きで、暇さえあれば田んぼや野山や鎮守の森で昆虫採集に明け暮れ、オルガンのレッスンにはまるで関心が無かった。今から思えば先生には大変申し訳なかったが、たびたびレッスンからも逃亡し、結局『バイエルン』という教則本のバッハの「メヌエット」という曲を習い終えたところでオルガンは放棄した。正式に音楽を習ったのは、学校の授業を除けばそれだけで、今では鍵盤楽器はほとんど弾けず、楽譜も一見しただけでは読めない。

さて、幼少期にはもう一つ鮮明な記憶がある。それは音楽好きだった父が、家でよく洋楽のレコードを聴いていたことである。父のコレクションだった1950年代～1970年代のスタンダードナンバーや洋画の主題歌の薫陶を受けたためか、現在でも私の最も敬愛する歌手はナット・キング・コールであり、アンディ・ウィリアムスである。「Mona Lisa」や「Moon River」といったナットや

アンディの代表作は、今でも折に触れて聴いているし、自分でもステージで歌っている。また、自分の楽曲においてメロディラインを特に重視するのは、こうした幼少期の原体験が深く関わっているのだろうとも感じている。

また、父はテレビの歌謡番組も好きで、とりわけ「懐かしのメロディ」は欠かさず観ていた。戦前の楽曲である「東京ラブソディ」や「蘇州夜曲」、戦後直後に流行した「リンゴの唄」や「青い山脈」なども、傍で聴いていた私は諳んじることができる。振り返ってみれば、オルガンからは逃亡した私だったが、歌うことだけは父譲りでずっと好きだった。当時流行のアニメソングはもちろん、自分が通っていた幼稚園の園歌から、小、中、高校、大学の校歌さえも、全てこの歳になっても覚えている。

ただ音楽好きの父と一緒にいて、当時どうしても馴染めなかったことが一つだけある。父と一緒に風呂に入ると、父は決まって謡曲を唸り出し、それを私にも教え込もうとした。幼少期の私は生理的にそれを受け付けず、父が「高砂の〜」と唸り始めると、一刻も風呂から上がりたい気分になった。とは言え、日々音楽に包まれていたのは、今から思うと大変幸せなことであり、音楽との接点を絶えず提供し続けてくれた父には大いに感謝している。これが今の私の原点となっている。

シンガーソングライターに憧れて：

中学校に入ると、サイモンとガーファンクルやカーペンターズに魅せられた。ただ、不思議と当時の同級生たちが夢中となっていたビートルズやローリングストーンズにはほとんど関心が無かった。高校時代になると、日本のフォークやロックも聴き始め、シンガーソングライターの松山千春や浜田省吾に憧れた。最初に作詞作曲をしたのは、高校三年生の十七歳の頃だったと記憶しているが、いつしか自分もシンガーソングライターを夢見るようになっていた。大学に入学して一年

経ってから、フォークソング研究会というサークルに入部し、初めて自分のギターも手にした。バンドも組み、自作曲をコンテストに応募したが、ことごとく落選したことは既に述べた。サークルの部長でありながらも、サークルの定期演奏会の舞台にすら一度も立つことができなかった。

ただ、この時代に一度だけ認められたことがある。国費の交換留学生として二年間を過ごした上海で、私は「外国人中国語歌唱コンテスト」という全国ネットのテレビ番組に出演し、二等賞に当たる「金竹賞」を受賞した。当時、台湾ではまだ戒厳令が敷かれ「反攻大陸」と唱えていた時代であり、中国では台湾出身の歌手の歌曲は、表向きは一切視聴が禁止されていた。それでも私はテレビ局を説き伏せ、テレサ・テンの「そよ風（原題：軽風）」という歌を歌った。したがって、中国の公共放送で台湾の流行歌手の楽曲を歌った第一号が私だったことはほぼ間違いない。

テレビの影響は絶大だった。番組放送後には、大量のファンレターが大学の宿舎に届き、上海はもちろん、旅先の南京や昆明の街角を歩いても見知らぬ人から声を掛けられた。ちょっとした著名人の気分も味わった。しかし、それだけだった。留学から帰国した私は、前述のとおり、自分の才能に見切りをつけ、卒業と同時に就職をした。今から思えば、歌詞も楽曲もまだまだ未熟だった。ただ、この時代に創った作品で今でもずっと大切にしている歌が一つだけある。留学時代の仲間たちにも愛された『上海オンマイマインド』という曲で、こんなフレーズが出てくる。

あなたは何を求めてこの街に流れてきたの？

あなたは今でもずっと綺麗な夢を見てるの？

プラタナスが一葉落ちる 冷たい雨に打たれて

音楽創作における挫折から、その頃ずっと抱いていたシンガーソングライターになりたいという

私の夢は、自身の胸の奥深くに封印されることとなった。

モンゴルの大地が教えてくれた：

時間は十数年ほど後に飛ぶ。2002年の8月のことである。私は当時小学校六年と四年の二人の息子たちとともに、モンゴルの大草原に向かった。二人とも地元の少年サッカークラブに所属し、私はそのクラブのコーチだった。モンゴルの大草原に行き、ラインの引いていない無限のフィールドでサッカーをしようという父親の誘いに、サッカー少年だった息子たちは飛びついた。

旅の初日と最後の晩は首都のウランバートルに宿を取り、中間の三泊四日は、ブルドという草原の村からチンギス・ハーンが首都としたカラコルムまでの約百キロを、ひたすら馬に乗って駆け抜けるというツアーに私たちは参加した。大草原でのサッカーもこの旅の醍醐味の一つだったが、人工の灯りが一切無い草原の夜に、満天の星がひしめき合っていた光景は今も忘れられない。この宇宙に比べれば自分の存在は余りにもちっぽけだ。それでも自分もまたこの宇宙の一部である。そんなことに気付かせてもらえた。ただ心が震えた。悲しい訳でも嬉しい訳でもないのに、星を見ているだけで自然と涙が溢れた。

その翌日から草原の乗馬ツアーが始まった。こ

の日は私の人生の転換点の一つとなった。乗馬のガイド役のエンへさんが、彼の甥っ子で当時十四歳の少年だったガンガ君を連れて来ていた。この土地で生まれ育ったガンガ君が颯爽と馬に跨がる姿は、まさに板に付いて格好良かった。ガンガ君と私の二人の息子たちは直ぐに意気投合した。ツアー中に暇さえあれば、三人の少年たちは無限のフィールドでサッカーボールをどこまでも追いかけていた。

エンへさんとガンガ君の的確な指南で、私も息子たちも程なく馬とのコミュニケーションが取れるようになってきた。いつしか馬も徐々にその歩みを早め、早足から駆け足となっていく。やがて人馬が一体となり、自分が風になったと感じた瞬間、それは大地の底から沸き上がるようにやって来た。モンゴルの大草原で愛馬が刻む駆け足のリズムとともに、忽然と私の脳裏に「Wonder land, wonder land・・・」というフレーズと生命力溢れるメロディが繰り返し響き始めたのだった。

後に「ガンガの大地」と名付けられたこの作品は、ほぼ十五年振りの私の創作曲となった。それまでの私は、感性というものは年齢を経るにしたがい枯渇していくものだと思い込んでいた。しかし、それは違った。あの時代、部屋の片隅にずっと置かれていた自分のギターのように、長い間ホコリをかぶり、ちょっとだけ錆び付いていただけ



だったのだ。そのホコリはモンゴルの風がさらってくれた。感性は枯れない。モンゴルの大地が教えてくれた。そして、私は再び歌を書けるようになった。

シドニーでアーティストと呼ばれる：

モンゴルを訪れた翌年の2003年4月から三年間、私はオーストラリアのシドニーに赴任した。シドニーは青空の似合う街で乾いた海風が心地良い。オーストラリア英語でブッシュと呼ばれる森も、シドニー湾に連なる入り江も自宅の直ぐ傍にあって、この街で二人の息子たちは多感な思春期を過ごした。

自宅のバックヤードにはクッカバラ（ワライカワセミ）やフクロウが訪れ、屋根裏では小型有袋類のポッサムがドタバタと毎晩大宴会を開いていた。週末や休暇にはシドニー郊外のピット・ウォーターと呼ばれる内湾によく出掛け、小型のボートを自分で操縦しては、息子たちや友人たちと船釣りを楽しんだ。地上では、この大陸の生物たちは、コアラやカンガルーに代表されるように、有袋類という形で独特の進化を遂げてきた。しかし、海に出れば、アジ、サバ、マダイ、クロダイ、カマス、サヨリ、キス、マゴチ、ヒラマサ、シマアジ、マトウダイ、ホウボウ、カサゴ、カワハギ、マイカ、マダコなど日本でも馴染みの魚介が手軽に釣れた。数千キロを隔ててはいても、海は繋がっているということを実感した。

シドニーで釣りにすっかりハマった次男は、毎日下校するや否や釣り竿を手にして近所のバルモラル・ビーチまで出掛け、釣り仲間の大人たちに餌のお裾分けをいただきながら釣りに勤しんでいた。彼が釣り上げた魚は稀に夕食の献立に加わることもあったが、たいていはビーチのフィッシュ・アンド・チップスの店に持ち込まれては、彼の小遣いとなって消えたいらしい。

さて、シドニーでお世話になった最初の上司が

帰国することとなり、その歓送パーティーの席上で、私は上海留学時代に書いた自作曲をギターで弾き語りで披露した。すると、そのパーティーに出席していたシドニー在住の一人の日本人写真家が、私にカメラを向けてバシバシと写真を撮り始めた。演奏が終わると同時に、彼女は私の傍につかつかとやって来て、さらっとこう言ったのだった。

「なあんだ。馬場さんってアーティストだったんだ。」

初めて他人からアーティストと呼ばれた瞬間だった。自分がアーティスト？少々小傍痒い気持ちではあったが、悪い気はしなかった。その写真家の金森マユさんとはそのことがきっかけで意気投合し、その後マユさんとのご縁で、シドニー在住の箏曲家、小田村さつきさんやメルボルン在住のピアニストでバイオリニストのトム・フィッツジェラルドさん、舞踏家のうみうまれゆみさんといった方々とも親しくなった。私は彼女たちからすっかりアーティスト仲間として受け入れられ、2005年にインドネシアのアチュで発生した大震災の義援金募集コンサートが開催された時には、私もシドニー在住のアーティストの一人として、出演者のリストに名前を連ねることとなった。

そして、2006年にシドニーから離任することになった際には、マユさんやトムさん、さつきさんにも協力してもらって自主制作した初のミニアルバム『From the Red Earth』の発表会を兼ねて、自分の歓送パーティーをライブコンサートに仕立ててしまった。シドニー時代もちろん創作は続けていた。オーストラリアの公園でよく見られるモートン・ベイ・フィグ・トゥリーの大樹をイメージしながら、息子たちの成長を願ってこんな歌も作った。

大きな樹になりたい

大きな樹になりたい
真夏の陽射しに木陰をつくり
足下で寝そべるあなたたちを
そっと見つめる大きな樹になりたい

大きな樹になりたい
そば降る雨の夜も木枯らしの朝も
あなたたちが凍えないようにこの手を広げ
凜と聳える大きな樹になりたい

あなたたちの瞳の輝く瞬間や
やがて訪れる青春の苦悩や
悲しみも歓びも別れも出会いも

そのひとつひとつに寄り添いながら

そしていつか春が訪れたならば
枝一面に薄紅色の花をまとい
あなたたちの約束された未来を
笑顔で祝福する大きな樹になりたい

(© Masaki Baba)

シドニーでは、もう一つ別のグループの友人たちとも親交を温めた。私自身の言葉に対する感性はここで磨かれたと言っても良い。冒頭で触れた二つの質問をブログで投げかけた作家の永淵閑さんが実質的な主宰者で、後に作詞家として私の創作の一部にも関わることとなったEさんも参加していた「どんた句」という句会のグループである。たまたま共通の友人の自宅パーティーで知り



合った閑さんに、私は引っ張り込まれたのだった。

「どんた句」というグループの名前は、閑さんが九州出身であったこと、そして私たちの例会がシドニーの日本料理店の「どんたく」という名前の店で開かれていたことに由来する。私たちの例会は句会と称しながらも、実態はほぼ飲み会であった。お互いの近況報告をし合い、宴もたけなわという頃合いで何となく句会に移行する。形式的には俳句もあれば短歌もあれば自由詩もあり、私は自分の歌の歌詞を投稿することもあった。投稿は事前にインターネット上で行ない、閑さんの「三無主義」＝「無比較、無批判、無否定」の精神によって、おのおのが「選句」した自作以外の俳句や短歌や詩の良いところだけを論評するのが決まりだった。

この会では、「吟行」と称して、折に触れてワインの産地のハンターバレーをメンバーで旅したり、閑さんの自宅で料理を持ち寄り、バーベキューパーティーなども開いたりした。とにかくこのメンバーと過ごす時間は楽しかった。何の縛りも無く、純粹に言葉と向き合える喜びを存分に感じ取ることができた。メンバーのそれぞれの感性からも大いに刺激を受け、「どんた句」を通じて、その後の私の創作に対する原動力が培われたと言っても過言ではない。句会としての活動は既に休止して久しく、お互いに滅多に会えなくなってしまうが、「どんた句」のメンバーとの交流は今もなお綿々と続いている。

そして約束の地、台湾へ：

冒頭に述べたように、私は2007年5月に台湾に赴任した。そして、2010年9月にいったんこの地を離れるまでのほぼ三年半の間に、私は台湾で三十五曲ほどの楽曲を創作した。ほぼ一ヶ月に一曲のペースで創っていた計算になる。ご存知のように昼間は交流協会台北事務所の文化室長としての任務があり、日々の残業も決して少なくはない。

さらに文化室関係の行事は国際会議、展覧会の開幕式、舞台公演など週末に集中するため、ほぼ毎週のように休日出勤もしていた。今振り返ると、いったいいつ音楽の創作をしていたのかと思うのだが、台湾という土地のバラエティに富んだ自然の美しさやこの土地に住む人々の温かさは、不断に私にインスピレーションを与えてくれた。台湾でも多くの仲間たちと出会った。彼らとの縁があったからこそ、現在私がここにいられると言っても過言ではない。ただ、台湾の仲間の話をする前に、シドニーの「どんた句」のメンバーで、私の創作上のパートナーだったEさんについてここで触れておかなければなるまい。

それは台湾に赴任して十ヶ月後の2008年の2月のことだった。一通の電子メールがEさんから届いた。彼女の詠む短歌は実に秀逸で、私はかねてから一目を置いていた。そのメールには、「タンポポの小さな祈り」という詞に添えられて、こんなことが書かれていた。

「今回歌詞を書いてみたのですが、もし気に入っていただければ幸いです。曲を付けていただけないかなと思い、失礼も顧みずお便りしました。」

私はその詞をじっくり読んでみた。子どもの頃にタンポポの綿毛をふっと吹いて遊んだ記憶が鮮やかに甦った。その綿毛は風に乗って大空をどこまでも飛んで行く。やがて新しい場所に根を下ろした綿毛たちは、次の春の訪れとともに、一面の黄色いタンポポの花を咲かせている。そんな光景が脳裏に浮かんだ。その瞬間、モンゴルの馬上での出来事と同じように、メロディがストーンと落ちてきて、私は一気にこの曲を書き上げた。それは曲を書いているというよりも、私というメディアを通じて、勝手に曲が生まれ出てくるという感覚に近かった。

翌日、Eさんには曲が出来上がったことをメー

ルの返信で伝え、続いてギターの弾き語りで簡単なデモ音源を録音して彼女に送った。ほどなく彼女からは驚嘆とともに、「旅に出した子どもが、期待をはるかに超えて立派に育って戻って来た」という表現で、私の作曲した作品に対する最大級の賛辞が寄せられた。それから彼女とは立て続けに5曲ほどを共同創作した。

ところが、その夏にEさんは病に襲われることになる。当初彼女は食餌療法で治療を試みたが、最終的に手術の道を選んだ。この間、私は朝晩彼女にメールでエールを送り続けた。と言っても、彼女が書いてくる治療方針や日常の出来事に対して、ひたすら寄り添うことしか私にはできなかったのだが。私は彼女と共同創作した5曲をミニアルバムにまとめて、彼女に送り届けようと決心し、レコーディングを手伝ってくれる音楽の専門家を探した。たまたま台北在住の作家の青木由香さんの紹介で、後に「爸爸辦桌 (Baba Band)」のベーシストで、バンドマスターとなる温子捷君が手伝ってくれることとなった。

子捷君は映画や広告の音楽制作を生業とし、自宅に録音スタジオを持っていた。彼は当初私の依頼に対して、外交儀礼として私に会うだけは会って、楽曲を聴いてからどう断ろうかと考えていたそう。というのも、彼のところには、自称ミュージシャンから対応に困るような依頼が来るのがこれまでも多々あったからだ。後々になって彼は話してくれた。紹介人の青木さんの立ち会いのもと、僕が子捷君のスタジオで「タンポポの小さな祈り」を披露すると、彼は「素晴らしい」と一言述べただけで、即座に協力を約束してくれた。これが台湾で音楽を生業とする人間から、初めて自分の楽曲が認められた瞬間だった。

ところで、ミニアルバムの制作過程で、バラードの曲にピアノが必要だということになった。この年の「台北映画祭」で「最優秀短編作品賞」を受賞した『天黒』(張榮吉監督)という映画に主演

し、子捷君とこの映画の音楽を共同制作した黄裕翔君というピアニストがいた。裕翔君は生まれつきの全盲ながら、当時台湾芸術大学音楽科の4年生であった。その彼がピアニストとしてこのミニアルバムの制作に協力してくれることとなった。その後、裕翔君はキーボーディストとして「爸爸辦桌 (Baba Band)」にも加わった。彼はどんなジャンルの曲でも、1回聴いただけで暗譜し、即興ですらすらとピアノを奏でてみせる芸当の持ち主である。

続いて、ドラマーである。前述の舒米恩 (suming) 君のバックバンドを子捷君とともに長らく務め、「週末ロッカー」を自称するサラリーマンの黄陽明君に白羽の矢が当たった。こうして2009年6月に「爸爸辦桌 (Baba Band)」は産声を上げた。

話をミニアルバムに戻そう。その後、Eさんの手術が無事に成功したこともあって、急いで制作する理由失ったミニアルバムは、私の忙しさに紛れてそのままお蔵入りしてしまった。結局、これが完成してEさんの手許に届けられたのは、二年後のクリスマスだったというオチが着く。

さて、この時期の台湾での音楽創作についても少し話を進めてみたい。私は毎朝オフィスにはMRTと呼ばれる電車に乗って私は通勤していた。自宅から最寄りの「中山国中」駅前に並ぶ屋台の一軒で、ベジタリアンのサンドイッチと無糖の豆乳を買い、オフィスで朝ご飯を摂るのが私の日課となっていた。その屋台の店主の小母さんは、私が代金を支払う時に笑顔で必ずこう一声掛けてくれたのだった。

「ありがとうございます。今日もどうぞ良い一日を！」

前日に少々辛いことがあって気分が重たい朝も、小母さんのこの一言で私は救われた。「よし、

今日も一日がんばるぞ！」という気持ちに自然となった。私はその人が幸せかどうかというのは、こうした日常の小さな出来事を小さな幸せと感じられるかどうか、その人自身が鍵を持っているのではないかと思っている。私はこうした日常の些細な幸せを「一ミリのしあわせ」と名付けた。そして、小母さんの笑顔を思い浮かべながら「一ミリのしあわせ」という曲を書き上げた。

台湾の日常風景や人々の温かさに加えて、台湾の自然の美しさも私に創作の動機を与え続けてくれている。2009年5月初旬のことだった。台湾の若い友人で、私の「義理の姪っ子」を自称してくれているAさんの誘いを受けて、私は彼女の故郷の苗栗県三義郷を訪れた。

その日一日だけで、私は心が震撼する三つの絶景と出会った。一つ目が「五月の雪」という異名を持つ「アブラギリ」の花である。真っ白なその花が満開となるさまは、まるで山がうっすらと雪化粧したようだ。そして、地面に散った花もまた大地に積もった雪のように美しい。まさに咲いてよし、散ってよしである。二つ目がアカシアの一種で黄色くて可愛らしい「相思樹」の花。雨に揺れていたこの花を、私は歌の中で「思い花」と表現した。そして、三つ目が闇夜に一面に飛び交う「螢」である。螢は幼少期に見慣れていたはずだが、数十年振りに見たその光は、ことのほか幻想的だった。ほのかな光を点滅させながら、まるで明日への道を照らして

くれているようだ。夜中に台北に戻った私は、まともや一瞬でこの歌を書き上げた。

五月の雪

風に舞い散る桐の花
そっと積もるは五月の雪
大切な人待ちわびる
君の心に寄り添うよ

雨に打たれる思い花
俯きがちに震えている
届かぬ想い秘めたまま
君の涙の訳を知る

闇に瞬く螢火は
遠い記憶の子守唄
儂い夢を乗せながら
君の明日を照らしている

風に舞い散る桐の花
そっと積もるは五月の雪
風に舞い散る桐の花
そっと積もるは五月の雪・・・

(© Masaki Baba)

アブラギリは台湾で私が最も好きな花である。台湾の客家人が居住する北部から中部の山地に群生することから、今ではこの花は台湾客家を象徴





する花となり、毎年3月下旬から5月上旬のアブラギリの開花時期には、各地で「油桐花祭り」が開催され、多くの観光客を集めている。先日私は最初にアブラギリと出会った三義郷を再訪した。あの日と同じように、山一面に「五月の雪」は満開だった。そして相思樹の花も、蛍たちも健在だった。台湾に住んでいて心から良かったと思えるひと時だった。

311 と復興支援メディア隊：

さて、2010年9月に交流協会台北事務所での任期を全うした私は、その翌年の1月には、交流協会への出向元であり、二十年間務めた国際交流基金も辞した。そして、友人の映像関係の仕事を手伝いながら、ほぼ隔月でバンドのライブ活動を続けるがためだけに台北に通うようになっていた。一方、私は音楽プロデューサーとしての活動も徐々にスタートさせていた。手始めに、自分のバンドのキーボーディストであり、ピアニストの黄裕翔君の東京でのソロリサイタルの実現に向けて、関係機関との調整も着々と進めていた。そんな矢先、311が発生した。

仙台出身であり、被災した親戚もいる中、居ても立ってもいられなかった私は、経産省の地域活性化キーパーソン研究会の委員である榎田竜路さんが立ち上げた「復興支援メディア隊」というボランティア組織に参加し、何度も被災地に入った。

大きなメディアでは取り上げられることのない、被災者の方たちの本音のメッセージや震災から立ち上がる人々の姿を映像で拾っては、ソーシャルメディア上で公開した。また、中国や台湾のメディアのドキュメンタリー制作チームの取材の支援もした。2012年2月には、交流協会に協力をお願いし、台湾から民視テレビの取材班と台湾芸術大学映画学科の学生を被災地に招聘して、それぞれが制作したドキュメンタリーのテレビ番組と映画の撮影をコーディネートした。現地では、通訳、ガイド、運転手等一人で何役もこなした。自分自身が取材対象ともなった。民視テレビでは、東日本大震災1周年記念特別番組として『異言堂』という人気番組の枠で、2012年3月10日と11日にこの取材の様子は放送された。『未来への一通の手紙』と題されたこのドキュメンタリー番組は、その年の「アジアテレビ大賞」の「評論家賞」を受賞した。一方、台湾芸術大学チームの作品は、『未来への元気』というドキュメンタリー映画にまとめられ、2013年の「すかがわ国際短編映画祭」に出品された。

復興支援メディア隊の活動は、やがて『未来への教科書～For Our Children～』というタイトルで、被災地の子どもたちが撮影した写真ポスター展という形に展開していった。同展は羽田空港を皮切りに、国会議事堂、文科省、各地方自治体、ロンドンオリンピック会場、国際交流基金シド

ニー文化センター等、国内外様々な会場で開催された。また、BS12チャンネルのレギュラー枠で、上記タイトルの震災復興ドキュメンタリー番組の放送にも発展していった。

さて、2011年4月25日に予定されていた黄裕翔君の東京でのピアノリサイタルに話を戻そう。公演がほぼ1ヶ月後に迫っていた3月末頃のことである。継続的な余震や福島第一原発事故の影響への不安から、海外からの多くのアーティストが来日公演を取り止める中で、私は台湾の裕翔君に電話を入れた。

「君も知っているとおおり、日本では未曾有の大震災が起こった。海外からのアーティストも軒並み来日を取り止めている状況だ。4月下旬の東京での君のリサイタルはどうするつもりだい？」

「えっ？馬場さん、何言っているの。もちろんやるよ。」

彼のこの一言で決まった。私たちは話し合っ彼のリサイタルをチャリティコンサートに変更し、全ての収益を義援金として被災地に寄付することとした。そして、2011年4月25日のリサイタルは、台北駐日経済文化代表処の全面的なサポートもあって、日比谷の小さな会場は満員となる盛況であった。裕翔君はこれが被災地との縁となり、その二年半後の2013年12月には、東北地方の被災地に入り、仙台、気仙沼、会津、郡山で巡回ピアノコンサートを行なった。また、相馬の山上小学校・幼稚園では、音楽の授業の枠で子どもたちとの交流も行なった。このコンサートツアーは、私が台北駐日経済文化代表処に企画を持ち込み、執行上のプロデューサーを務めた。最終的には、台湾文化部、外交部の主催、同代表処、復興支援メディア隊及び私の会社が共催という形で、公演開催地となった地元の方々の全面的なご協力のもと、実現に漕ぎ着くことができた。この場をお借りして、関係の皆

様には改めて御礼を申し上げたい。ツアー中の私は、相も変わらず舞台監督、司会、通訳を兼任するという忙しい役回りで奔走することとなった。裕翔君のピュアで温かなピアノの音色と同時にサポートイングアクトとして同行した日本人シンガーの土岐千尋さんの「大人の子守唄」と称される癒し系の歌声は、公演の先々で観客の方々の感涙を誘った。このコンサートが被災地の方々の心の復興の一助になればという裕翔君や私の思いは、何とか届けられたのではないかと思っている。このコンサートの模様は、2014年3月に、前述のBS12チャンネルの『未来への教科書～For Our Children～』という番組で既に放映された。また、裕翔君と私は、2012年3月11日に台北郊外の淡水で行なわれた『謝台湾！』震災一周年記念イベントにも、ゲスト出演したことも併せて記しておく。

台湾映画『光にふれる』と出会い、再び約束の地へ：

さて、ここで2012年の台北映画祭で初公開され、この年の台湾でのヒット作の一つとなった映画『光にふれる（原題：逆光飛翔）』（ウォン・カーウァイ製作総指揮、張榮吉監督）に触れておこう。この作品は、上述の黄裕翔君の生い立ちをもとに改編され、裕翔君自身が主演している。「台北映画祭」で「観客賞」と「最優秀主演女優賞」（張榕容）を獲得し、その後も釜山、東京、ベルリン等の国際映画祭にも招待された。この作品はこの年の「金馬賞国際映画祭」でも「最優秀新人監督賞」（張榮吉）、「台湾年間傑出映画人賞」（黄裕翔）、「ミラノ国際映画祭」では「最優秀主演男優賞」（黄裕翔）を受賞し、今年2014年2月には日本でも公開されている。

そして、この映画は私にとっても記念すべき作品となった。蔡健雅（タニア・チュア）が歌ったこの作品のエンディング主題歌「海のそばで（原題：很靠近海）」の作曲者として、また友情出演の

俳優として、私もエンドロールに名前を連ねることとなったのである。金馬賞国際映画祭の授賞式では、監督や主演俳優に混じって、私もレッドカーペットの上を歩かせていただいた。この主題歌がきっかけとなり、その年の暮れには、私は某大手レコード会社とも、専属作曲家としての契約を結ぶこととなった。

こうして台湾で音楽家としての一步を踏み出すこととなった私は、活動拠点を台北に移し、2013年1月には自ら会社を立ち上げ、自分自身の活動をマネジメントするとともに、民間の立場から音楽を中心に日台文化交流の橋渡し役を目指していくこととなった。この決定に当たって、私は特に感謝している人物がいる。二人の息子たちである。ともに既に成人した彼らは、私がこの計画を打ち明けた時に、揃ってこう言って背中を押してくれたのだった。

「お父さん、才能あるんだから、とことんやってみるべきだよ。」

今では、彼らは私の音楽の最大の理解者であり、支持者である。一人の父親として、音楽家として、これ以上の幸せはない。

紆余曲折と新たな挑戦：

昨年3月に満五十歳の誕生日を台湾で迎えた。その昔、日本では「人生五十年」と言われた。自分は既にその年齢に達したが、これまでの五十年間を「前世」の出来事と思うようにした。そして、今日から自分の「今世」が新たに始まる。するとこんなふうに思えてきた。「前世」の知識と経験と人脈を持ったまま「今世」を行きて行ける。これは何と大きなアドバンテージではないか。もちろん、新たな「今世」は零歳からのスタートではない。二十年ほど時計を巻き戻し、だいたい三十歳くらいから新たに人生を始めさせてもらえる

と思えば良い。こんなふうに考えると、それだけで心が踊った。

一方、実際の「今世」はそこまで甘くないのも現実である。とりわけ外国人の私にとっては、台湾の音楽業界は未知の世界であり、全くの手探り状態からのスタートだった。自分にとって有り難い人もそうでない人もいる。足下を見られたことも、騙されたことも、信頼していた人から裏切られたこともある。創作のパートナーだったEさんも、結局病気が再発し、昨年5月に帰らぬ人となってしまった。しかしながら、新たな試練は、実は貴重な学習と成長の機会でもあり、次の新たな挑戦を生み出してくれるということにも気付いた。紆余曲折も決して無駄ではない。何より本来やりたかった世界に身を置けていることに自ずと幸せを感じずにはいられない。

最近では音楽関係以外にも、俳優や声優、モデル、インタビュアー、ライター等の仕事もいただいている。今年の旧正月映画『大稻埕』（葉天倫監督）では、台北州警察署長の役を演じた。新たな分野の挑戦は、本業の音楽にも様々な刺激やアイデアを還元してくれている。自分の裡なるものを表現するという点においては、全てのアートは繋がっている。仕事を受けるかどうかの基準は一つ。その話を聞いて心がワクワクするかどうかである。

この数年来、ずっと温めてきたことがある。それは、台湾の温泉や景勝地を巡ってご当地ソングを創る作業であり、既に何曲か書き溜めている。昨年、台湾の「流し」の歌手、阿家君と「八得力（バッテリー）」という新たなバンドも結成した。一つの曲に日本語、台湾語、中国語、時に英語が飛び交うユニークなバンドである。ご当地ソングはこのバンドの持ち歌として、今後少しずつ披露していくこととなる。

また、台湾には日本の本歌に台湾語の歌詞が付けられ、台湾人の心の歌として親しまれている曲が数多くある。日本と台湾の歴史や文化の交差点

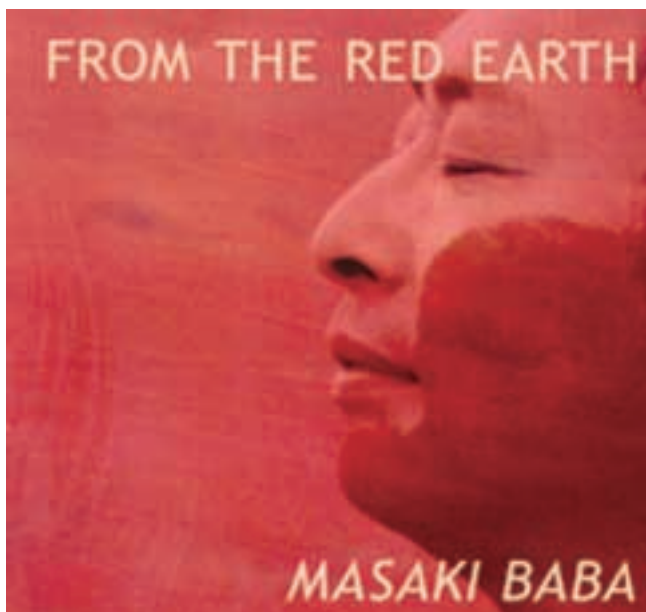


に位置するこれらの曲も拾い上げ、歌い継いでいくことも自分の役割の一つと感じている。

時々私の決断に対して、賛辞か外交辞令か半ば呆れてなのか「勇気がありますね」と言われることがある。ただ、私は自分の心の声にしたがっただけである。偶然の積み重ねがここまで私を導いてくれたが、振り返ってみると日本と台湾の友人たちによって紡がれたこの縁は、偶然を装った必然とも思えてくる。若い頃は、自分がやりたいこと、自分の能力でできること、自分の使命としてやらなければならないことが、なかなか一致しなかった。やりたくてもできなかつたり、やらなければならない

いのにやりたくなかつたり……。しかし、年齢を重ねた今だからこそ、またこうした決断ができたからこそ、結果としてやりたいこと、できること、やらなければならないことが次第に一点にフォーカスされてきたのだろうと感じている。

自分の人生劇場がこれからどのような方向に向かって行くのかはわからない。今はこれまでの縁に感謝しながら、五十歳を過ぎて始まった「今世」の一日一日を集中して生き切るのみである。そして、もし六十歳を過ぎた自分が、あの時見た夢の光景と同じようにどこかで歌っていられるとしたら、これ以上望むことは私には何もない。



©MayuKanamori



©Baba Band

海外での市場開拓、展示会を有効に活用する方法

ブースレイアウト・掲示物の作り方、販促ツールの作り方

Taipei Computer Association 東京事務所 駐日代表 吉村 章

はじめに

海外でのビジネスマッチング、技術アライアンス、調達や販売のパートナー探しなどをサポートする業務を行っている。海外で開催される展示会に出展する企業を支援することも重要な業務のひとつである。(写真1)

基本は「もの作り分野」、そして「IT分野」であるが、最近ではITを使った農業支援、食品や観光分野で海外に進出する企業をサポートする業務も増えてきた。中国をはじめとし「生産拠点」から「マーケット」としてビジネスを展開する企業をサポートする業務も増えている。

この原稿は中小企業向けに実施している「海外市場開拓セミナー《実践講座》」の内容を原稿にまとめたものである。3回シリーズで実践的な内容を紹介していきたい。

今回は、展示会のブースで足を止めた来場者に対してどのように出展製品をPRしたらいいか、ブースレイアウトの方法、掲示物の作り方、展示会用販促ツールの作り方について。次回は、事前PRのコツ、ホームページを活用するノウハウについて。さらに、3回目では会期後のフォローの仕方、展示会の名刺を成約に結び付けるノウハウなどについて解説していく。

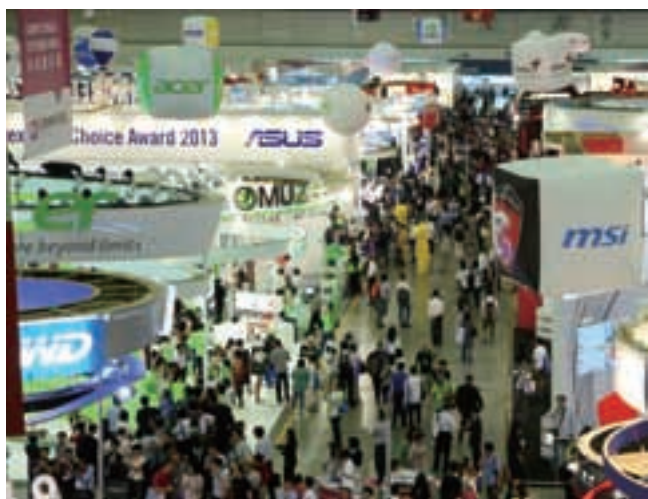


写真1 台北で毎年6月に開催されるCOMPUTEX(台北)。世界中から3万5千人のバイヤーがCOMPUTEXに訪れる。

ここで写真2をご覧ください。海外の展示会に出展した日本企業が地域物産のセールスキャンペーンでプロモーションを行っている様子を写したスナップである。「祭り法被」(まつりはっぴ)

で華やかさを演出して、日本製品をPRしようとしている場面である。日本国内で行うイベントであればよく見かける風景であるが・・・。

実は、この「祭り法被」は中華圏では注意したいポイントのひとつ。もし、台湾や中国の展示会



写真2 「祭り法被」の「祭」という文字は「弔い」を意味する。

で揃いの祭り法被姿の日本人を見かけたとしたら、台湾人や中国人はそれを遠巻きに不思議そうに見たり、眉をひそめたり、中には避けて通る人もいるかもしれない。

なぜならば、法被の背中にある「祭」という漢字は、「弔い」を意味し、中華圏では縁起が悪い言葉なのである。華やかな雰囲気演出するどころか、まったくの逆効果……。自らイメージダウンを演出していることになる。「知らない」ということは実に恐いことである。関係者の方々は誰もアドバイスをする人がいなかったのだろうかと思う。

知ってさえいれば絶対に起こさないミスである。しかし、ただ知らなかったというだけで、経費もそこに関わる人たちの労力もすべて無駄になってしまう。誰か気付いてアドバイスする人がいればよかったのだが……。と残念に思う。

海外では「あたりまえ」だと思っていることが、実は「あたりまえ」ではないことがたくさんある。日本人が良かれと思ってやっていることがその逆だったりすることもある。知ってさえいれば起こさないミスであるが、知らないが故に起こしてしまうコミュニケーションギャップも意外に多い。このケースもそういう事例のひとつと言えるだろう。

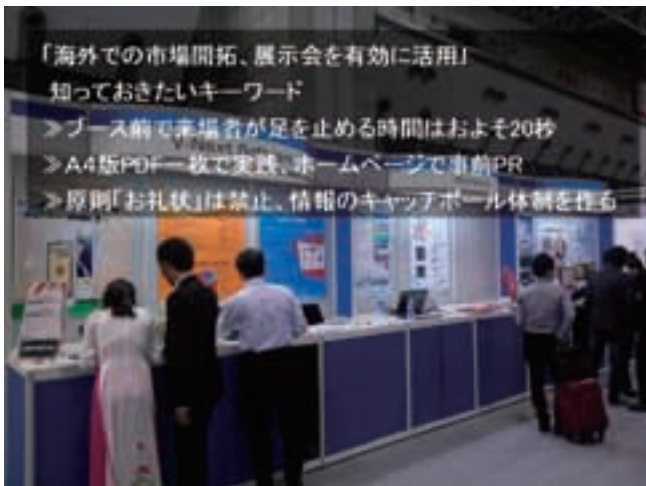


写真3 実は海外の展示会だけでなく国内の展示会に出展する場合でも応用することができるノウハウである。

日本の自治体や業界団体が観光フェアや地域物産展など海外の展示会でやってしまいがちなミスである。もし、この原稿を読んだ方で心当たりのある方がいたら、ぜひ関係者の方に教えてあげてほしい。中華圏でプロモーション活動を行うとき、「祭り法被」はNGなのだ。

海外での市場開拓、展示会を有効に活用

さて、今回から3回シリーズで「海外での市場開拓、展示会を有効に活用する方法」を紹介していきたい。まず、次の3つのキーワードをご覧いただきたい。

▶ ブース前で来場者が足を止める時間はおよそ20秒

▶ A4版PDF一枚で実践、ホームページで事前PR

▶ 原則「お礼状」は禁止、情報のキャッチボール体制を作る

いずれも筆者がこれまで海外に展示会の現場で日本企業を支援する活動を行ってきた中で蓄積してきたノウハウである。またこれらの内容は海外の展示会に出展するケースだけでなく、国内の展示会でも使えるノウハウである。ぜひ、ご覧いただきたい。

また、「海外市場開拓セミナー〈実践講座〉」ではより詳細な内容を取り扱い、個別企業の具体的なアドバイスも行っているのでも、興味がある方はTCA東京事務所 (<http://www.tcatokyo.com>)まで、お問い合わせいただきたい。

1. ブース前で来場者が足を止める時間はおよそ20秒

展示会場で通路を歩いている来場者がブースの前で足を止める時間はおよそ20秒である。もちろん、足を止めずに素通りしていく来場者もいる。歩きながらちらっと出展製品を見て、通り過ぎていく人のほうが実は圧倒的に多いはずである。

会期前にホームページで事前情報をしっかりチェックして、決め打ちで御社のブースにやってくる来場者は残念ながら多くはないはず。来場者のほとんどは会場を歩きながら製品を見て歩く。何か面白い製品がないかどうかぶらっと歩いて会場を回る来場者がほとんどである。

そんな来場者に出展製品をPRするためには工夫が必要である。まずは、来場者にブース前で20秒間足を止めてもらうことが先なのだ。ブースにどんな製品を出展しているのか、どんな目的で出展しているのか、短いフレーズでわかりやすく、インパクトのある表現でしっかり伝える工夫が必要である。

どんな目的で出展しているのかというのは、たとえば出展製品を使ってくれるユーザー向けの売り込みなのか、販売パートナー募集なのか、技術をPRするための出展なのか、共同開発やOEM/ODMなど量産分野でアライアンスパートナーを募集しているのか、明確に意思表示することである。

このように出展目的を明確に意思表示していないブースが意外に多い。製品を展示しているだけで、結局のこの出展者がこの製品をどうしたいのか、話を聞いてみないとわからないことがある。出展側は「来場者はわかってくれている」と考えているが、実は伝わっていないことが多い。

しかし、来場者に判断させるのではなく、掲示物で出展の意図を瞬時に伝える工夫をするべきである。来場者が考え、判断するためのコマ何秒の時間が明暗を分けることもあるのだ。通路を歩いている来場者の視覚にはさまざまな方向からいろいろな情報が飛び込んでくる。その中で来場者の足を自社ブースの前で止めさせるためには、フレーズの言葉選びやポスターの作り方など、ほんの少し工夫でも重要なのだ。

また、出展社の中には「ユーザーでも、代理店でも、アライアンスパートナーでも、興味がある



写真4 ブースの壁にある水色と黄色のボードをご覧ください。FNA主催の「上海ものづくり展」では主催者が出展目的ボードを準備する。出展側が「わかっているはず」と思っていることが、意外と来場者には伝わっていないことがある。

方はすべてウェルカム」、「すべてOK」、「みんなやりたい」という姿勢で出展する企業をよく見かける。(台湾企業には特に多い)

しかし、「何でもできます」「何でもやります」という姿勢は目的がかえって曖昧になり、結局のところ「何にもできない」「何も始まらない」という結果に終わるというケースがたいへん多い。

つまり、何が出展の目的であることを明確にすることが重要であり、仮に複数の目的がある場合でも、何を優先させるべきかは事前にしっかり打ち合わせを行い、ブースの活用方法（展示物の配置やポスターの記載内容）についても目的に合わせた準備をするべきである。

2. 「3-1-0.3の原則」 3つの掲示物を準備

私は実践講座や個別相談に来る皆さんに「3種類の掲示物を準備してください」とアドバイスする。第一に「3mポスター」、「1mパネル」、そして「0.3mPOP」の3つである。これは「幅3mの大きさのポスター」という意味でない。(誤解のないように)

「3mポスター」とは、3mの離れた距離から見ても、ポスターに書かれている文字がはつき



写真5 通路から見るとブース内のパネルには何が書いてあるか見えない。字の大きさや来場者をキャッチするためのフレーズに工夫が必要。

り読み取れるポスターという意味である。文字が小さいと離れたところから内容を読み取ることができない。つまり、離れたところからでもわかる文字の大きさをポスターを作ることが大切である。

≫「3 m ポスター」は来場者の足を止めるためのポスター

写真5をご覧ください。あなたは通路を歩いてこのブースに近づいていくことを想定しながらこの写真をご覧ください。恐らく、よほど近づかない限りブース内の壁にあるポスターの文字が読み取れない。

まして、ポスターの下に担当者が座っていたとしたら、恐らくあなたは近づいて行ってこのポスターに何が書かれているか見ようとはしないはずだ。これは出展する側にとっては機会損失。残念ながらこの壁と展示物が有効に活かされていない。せっかくのスペースが死んでいる。

「3 m ポスター」の役割は通路を歩いている来場者の足を止めることである。来場者は「このブースでは何を展示しているんだろう」と考えながらたくさんのブースを見て歩く。「3 m ポスター」にはそういう来場者の足を止めるためのフ

レーズを記載する。

足を止めた来場者は、次にブースに近づいてくる。ここでブースの前に来場者が滞在する時間はおおよそ20秒である。この20秒以内で製品について、出展目的について、来場者にメッセージを伝えるのも「3 m ポスター」の役割である。

ポスターには絞り込んでフレーズを必要最低限のことをコンパクトに記載する。フレーズは20秒間足を止めてもらうための言葉を練りに練った上で記載したい。この20秒間で何を伝えるかというポイントはたいへん重要なのだ。

たとえば、近くに何か掲示物があれば試していただきたい。その掲示物から5～6歩遠ざかったところから見てみる。(歩幅をおおよそ50cmと想定)通路を歩いている来場者がブースに掲示してあるポスターを見る距離である。

掲示物から5～6歩遠ざかったところで見える文字と小さくて読み取れない文字とがあるはずである。つまり、文字が小さくて読み取れないポスターは掲示するスペースを十分に活かしていないことになる。これがこのスペースが死んでいるということである。

限られたスペースを最大限有効に使う。出展料に対する費用対効果を考えるとき、少しのスペースでも無駄にしない。知恵を絞ってスペースを貪欲に有効活用する。展示会にはこういう姿勢で臨みたい。展示台のスペースも、壁のスペースも経費をかけて買ったスペースである。

しかし、ひとつのポスターにあれもこれもと情報を詰め込むのも禁物である。情報を詰め込みすぎで結果的に逆効果というケースがよくある。言葉を選び、吟味し、工夫を加え、練りに練ったフレーズを掲示すべきである。

「3 m ポスター」の役割は通路を歩いている来場者の足を止めることである。大きな文字で、わかりやすい記載、興味のあるフレーズやインパクトのある言葉使い、画像やイラストなど視覚に訴

える工夫なども効果がある。

≫ 「1 m パネル」は製品を1分間で理解できる内容を

写真6をご覧ください。ガラスショーケースを有効に活用して上手に製品を展示しているブースであるが、奥の壁に掲示しているパネルの文字が小さくて通路からは見えない。壁のスペースが死んでいる事例である。

「1 m パネル」の役割は1 m の距離で来場者に出展製品を説明することである。「3 m ポスター」で来場者をキャッチする。20秒間足を止めた来場者は展示製品のほうに近づいてくる。「1 m パネル」の役割は1 m の距離で出展製品について来場者に具体的に説明することである。

先ほどの「3 m ポスター」と同じように、1 m の距離から見た掲示物をイメージしていただきたい。1 m の距離から見やすい文字の大きさ、図表のレイアウトがあるはずである。文字が小さすぎると足を止めた来場者にポイント伝わらない。

逆に必要以上に大きい文字を使うのはスペースの無駄である。1 m の距離からパネルを見て、文字が小さすぎず大きすぎず、重要なフレーズは大きめにしたり、列挙したいフレーズは箇条書き



写真6 製品製説明のパネルは1 m の距離から見てわかりやすい情報量と文字の大きさに気をつける。写真のパネルは文字が小さく見にくい。奥の壁が有効に活用されていない。

にしたり、文字の大きさを内容にも強弱をつけて、パネルを作ることがポイントとなる。

また、ここでもまた盛り込みすぎないという点も重要である。目安は「1分間」である。来場者が1分以内で製品概要がわかるような情報量を心がけるべきである。一般的にこのパネルにも情報を盛り込みすぎて逆効果になるケースがたいへん多い。詳細については次のPOPに記載すればいい。

≫ 「0.3mPOP」は実際の展示製品の横に並べる

30cm まで近づいて見せるPOPを準備する。POPの役割は来場者に出展製品のスペックの詳細やその製品の持っている「強み」について、具体的に伝えることである。A4版程度の大きさに必要な情報量を詰め込み、このPOPは出展製品の横に並べて置くことが基本である。

「1 m パネル」で出展製品の概要を理解した来場者を次に30cmの距離まで誘導し、実際に出展製品を手にとってもらう。または、至近距離でじっくり出展製品を見てもらう。その横にパネル型に加工したPOPを立て(写真7)、出展製品の詳細を知らせるものである。

詳細を説明するので「書き過ぎてはいけない」ということはない。しかし、できればPOPもポ



写真7 30cm の間近な距離で製品の特長を訴えるのがPOPの役割である。

イントを絞り込んで伝えるべき内容を記載したい。伝えたいポイントの優先順位、来場者が知りたがっているだろう点に先回りしてPOPには記載する。言葉を吟味してA4版一枚の大きさをここでも有効に活用したい。

3. ブースのレイアウト

次にブースのレイアウト、展示物の配置について取り上げてみたい。写真8は展示会で主催者が準備する一般的な「標準ブース」(パッケージブース)のレイアウトである。出展企業は基本的に出展製品を持ち込むだけで出展できる。追加の造作や装飾を必要としないブースである。

受付カウンターやテーブル・椅子、スポットライトや社名ボードなどがひとつのパッケージとなっている。ブースには基本的に必要最低限のものが揃えてあるが、ほんの少しの工夫でより効果的にブースを活用することもできる。

写真9をご覧ください。これはこれまで海外の展示会で出展企業をサポートしてきた経験から、効果的なブースの使い方事例を3つにまとめたものである。「海外市場市場開拓セミナー〈実践講座〉」ではブースレイアウトについてこの3つの基本パターンを紹介している。

どの方法が一番理想的というものではない。出

展製品によって、展示会の出展目的によって、または展示会の性格によって、来場者の視察目的によって、それぞれ理想的なブースレイアウトを考えてみていただきたい。

» 「スクリー型」は展示会出展の基本、オーソドックな推奨パターン

写真9の左上は「スクリー型」と名付けた。標準ブースを改良したオーソドックな推奨パターンである。キャッチ用の「3 m ポスター」で来場者の足を止めさせ、「1 m パネル」の前まで誘導する。ここで1分間パネルの内容を見てもらい、次に出展製品の展示位置へ誘導する。

製品に興味を持った来場者は次にテーブルと椅子のほうへ誘導し、ここで具体的な製品説明に入る。椅子に座った来場者は最低でも3分間は滞在する。具体的な説明に入ることができる。つまり、ブース内に誘導して椅子まで座っていただくことができるかどうか、ここが勝負である。

この場合、「1 m パネル」の前、展示製品の前のスペースをたっぷり確保しておくことが重要。この場所が狭いと来場者はブースに足を踏み入れにくい。つまり、テーブルと椅子の配置場所には十分気を配りたい。人の流れが左回りスクリー



写真8 標準ブースは基本的に出展製品をブースに持ち込むだけで出展することも可能。

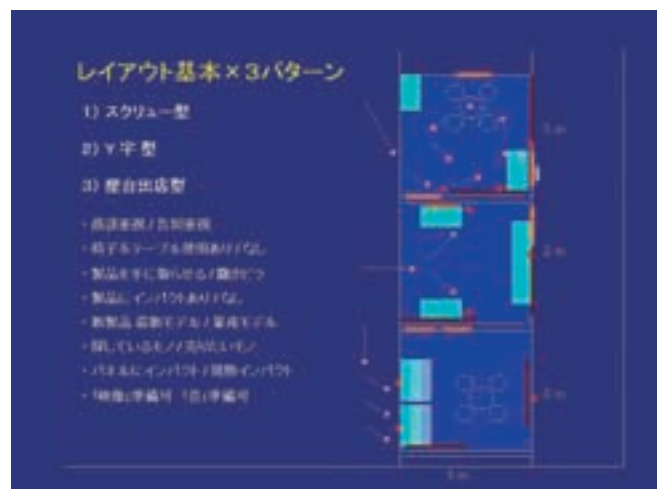


写真9 「スクリー型」「Y字型」「屋台出店型」にはそれぞれメリットとデメリットがある。出展製品、出展目的によって、効果的なレイアウトを工夫したい。

になるようにイメージして配置を考える。

入ってくる人を遮るような(邪魔になるような)テーブルと椅子の並べ方は避けたい。まして椅子に座って仕事していたり、休憩していたり、ブース内を荷物置き場にしていたりすることは論外だ。あくまでもお客様重視(来場者重視)のレイアウトを考えたい。

この図の場合、上から下への人の流れをが多いことを想定している。もしも、逆の場合ならキャッチ用のポスターは上の位置になる。右回りスクリーンをイメージして出展製品を配置する。人の流れどちらになるのかによってブースのレイアウトは考えていただきたい。

≫ 「Y字型」は出展製品が多い場合、商談より告知PR重視のケース

写真9の中央は「Y字型」である。ブース内のテーブル・椅子を撤去する。標準ブースにあるブース内に使わずにブースを広く使う。来場者を「3 mポスター」でキャッチすることは同じ。ブースは人が入りやすいように製品配置を工夫する。受付カウンターを置く場合は横置きにしない。

ブース内を明るくする、製品展示を胸元の高さにする、入り口に余計なものを置かない、名刺受やパンフレットはブースの奥の展示台に置くなどの配慮が必要である。一番重要なのは人の配置である。説明員はブースに来場者が入りやすい場所で待機する。この点にも気を配りたい。

製品展示を胸元の高さにする場合、展示台ではなく壁に棚を付けると効果的。棚にはFlatタイプ(水平な棚)とSlopeタイプ(斜めに装着する棚)があり、製品を並べて見せたい場合やパンフレットを置く場合はSlopeタイプが効果的だ。

「Y字型」のデメリットは商談用のテーブルと椅子が置けないことである。ブース内で具体的な商談ができない。商談にまで持ち込むのが主たる目

的ではなく、出展製品の告知PRやを目的とするケースに利用するとよい。

また、説明すべき内容や来場者に知って欲しいポイントをパネルとPOPでしっかり説明できる体制を作る。テーブルでじっくり説明することができないため、パネルやPOPの作り方を工夫することも必要である。

≫ 「屋台出店型」では出展製品を通路側に並べる、ブース内は商談スペースとして活用

最後に紹介するのは写真9の左下「屋台出店型」である。これは通路側ぎりぎりに展示台を通路と平行に並べ、出店製品を横一列に並べて展示する。

「屋台出店型」のメリットは通路を歩く来場者に間近で製品を見てもらえる点、それから「Y字型」のようにブースの中に入る必要がないためより多くの来場者を製品の近くに誘導できる点である。手に取って見ることができる製品を出展する場合はこの方法が適している。

もうひとつのメリットは展示台の後ろに十分な商談スペースを確保することができる。一般の来場者はこのスペースには立ち入らないので、本当に商談をしたい人だけをこのスペースに案内して座っていただくことができる。椅子を2~3個追加して、5~6人でのミーティングも可能だ。

事前にブースに来る人が想定されている場合、ブース内でじっくり商談をしたい場合、招待者をブースに招く場合は「屋台出店型」が適している。展示会では事前にどれだけの見込み客とやりとりができているか、事前の準備と来場予定社数の把握、実はこれが重要なポイントだ。

「屋台出店型」のデメリットは「1 mパネル」を掲示するスペースがない点である。キャッチ用の「3 mポスター」はブースの奥の壁でよいだろう。しかし、「1 mパネル」がブースに向って左右の2面しかない上に、ここでじっくりパネルを見てもらうにはパネルの掲示場所として相応しく

ない。

そこで、出展製品の横に並べる POP を工夫する必要がある。展示台の下のスペースを有効に利用したり、写真7のように展示台を階段型にして POP を立てかけたり、小さなポスターを貼るスペースを作ったり、または写真11のようにパネル掲示用の壁を作り製品説明のポスターやパネルを掲示するというレイアウトもできる。

また、写真10のようにガラスショーケースを置いて、ピンスポットで製品をライトアップすると注目度が増す。(ただし、この場合は来場者は



写真10 ガラスショーケースを活用すると高さを稼ぐことができるだけでなくブースが華やかになる。

出展製品を気軽に手に取ることができなくなるというデメリットもある)

「Y字型」に比べて展示台の面積が少ないが、写真7や写真11のように展示台を階段状にして、縦方向に面積を稼ぐという方法が可能である。工夫次第で展示スペースは十分に確保できる。

最近では写真12のように大型モニターを使って動画や静止画のスライドショーで製品をPRするケースが増えてきた。画像や動画に加えて「音」があることも重要なポイントだ。解説の音声だけでなく、BGMが流れていてもいい。効果的な



写真12 大型モニターはチャッチ用のポスターよりも効果的。画像やショートムービーで製品をPRする。



写真11 展示台を階段状にして、さらにパネルやポスターの掲示スペースを作ることも効果的。



写真14 「Y字型」レイアウトの事例。展示台は標準の75cmの高さより、オプションで100cmの高さにしたほうが製品を手取りやすい。手に取ってもらいやすい高さ、戻しやすい高さを工夫する。

「音」を準備することは来場者にインパクトがある。

≫来場者の目線で出展の準備をする

商談重視か告知 PR 重視か、つまりテーブルと椅子を上手く使うか使わずに済ませるか、手に取ってもらうことのできる製品か、ポスターやムービーで説明したほうが効果的か、こうした点を考慮してブースのレイアウトを考えることも必要である。

さらに出展する製品がインパクトがある製品か、そうでないかという点も考慮する。インパクトがある製品とは、類似製品がない、最新製品である、他に真似できない「強み」がある、徹底的に希少価値、徹底的に安いといった点である。

最終的には、来場者がその展示会に期待して探しているモノであるかどうか、期待を裏切る（いい意味で）インパクトを与えられるモノであるかどうかに関わってくる。ポスターやパネルの作り方も具体的な出展製品の並べ方も、売りたいモノを売る側の都合で出展するのではなく、探す側の立場に立って出展方法を工夫することが大切である。

4. 展示会販促ツールの作り方

海外市場開拓セミナーでは講座の中で展示会では3種類の印刷物を準備すべきとアドバイスしている。まず準備すべきは会社案内や出展製品の概要がわかるパンフレット、次に展示会で来場者に配る「撒きビラ」、そして3つ目は商談用の「セールスキット」である。

「セールスキット」とは会社案内や出展製品の概要がわかるパンフレットに加えて、製品の詳細なスペック表、製品ラインナップなどを説明する詳しいカタログ、価格表や見積書の要求シートなどを1セットにして準備したものである。



写真 15 「強み」PR シートのサンプル。作成のポイントは A 4 一枚にまとめる、ポイントは 3 つに絞る、三つ折りで「ビラ」として活用することも想定して作る etc.

≫会社案内と製品概要は「強み」PR シートを作る

写真 15 をご覧いただきたい。これが「強み」PR シートである。会社案内や製品紹介のパンフレットはそれぞれ A 4 版一枚にまとめる。会社の「強み」や製品が持っている「強み」をそれぞれ 3 つのポイントに絞ってまとめる。海外市場開拓セミナー《実践講座》では、これを「強み」PR シートと名付けた。

「強み」PR シートは会社概要を説明するものを 1 枚、そして出展する製品ごとに 1 枚ずつ準備する。会社案内のパンフレットやそれぞれの製品概要を説明するパンフレットがすでにある場合でも、「強み」PR シートを作ることをお勧めしている。

「強み」PR シートの作り方と活用方法について、詳しい内容は次回原稿で説明したい。

≫「撒きビラ」の良し悪しがが重要

「撒きビラ」とは展示会で来場者に配る製品紹介の簡易パンフレットである。出展する製品ごとに 1 枚ずつ準備することが理想的である。製品の「強み」をそれぞれ 3 つのポイントに絞ってまとめ、ビラに記載する。展示会ではブースで徹底的

に来場者に配る。

写真や図表を取り入れて、ポイントを絞り込んで簡潔にわかりやすく説明し、問い合わせ先を明記、ビラを受け取った人が後で問い合わせをしたくなるような仕掛けを盛り込むことが撒きビラ作りのコツである。

先ほど述べた会社概要と製品紹介のパンフレット、そしてこの「撒きビラ」は、まず「強み」PRシートを作って、それを活用する形で作成する。つまり、「強み」PRシートはパンフレットや「撒きビラ」、さらには製品紹介の「1 m パネル」や「0.3mPOP」を作成する際の基本となるものである。

「強み」PRシートをどう作るか、そしてその活用方法について、「撒きビラ」の作り方については、次回に詳しく説明したい。

≫「セールスキット」を準備する部数

「セールスキット」とは会社案内や出展製品のパンフレット、製品の詳細なスペック表、製品ラインナップの詳細なカタログや価格表など、商談に必要な資料を1セットにして準備したものである。袋に入れてすぐに渡せるような形で準備する。

詳しい製品紹介があるので来場者全員に配る必要はない。むしろ、20秒足を止めて1分間でパネルの内容を理解した後、椅子に座って詳細な製品紹介をするタイミングで相手に渡す。製品に興味があり、具体的に商談に入る相手に渡せばよいのである。

もちろん予算に余裕があり、詳細な製品紹介のパンフレットをたくさん配ることができるのであれば、たくさん準備しておいたほうがよい。商談に繋がる可能性が少しでもあれば、できるだけたくさんの来場者に詳しい資料を持ち帰ってもらいたい。

しかし、多くの展示会で製品パンフレットを無駄な配り方をしている様子が気になる。会場内のゴミ箱にたくさんの資料が捨てられている様子をよく目にする。もしかしたらこうした数も計算に

入れた上で製品プロモーションが必要なのかもしれないが、無駄が多すぎる気がする。

無駄を恐れて配る量を制限することは機会損失に繋がることかもしれない。高い出展料をかけてわずかな印刷費を節約したばかりに機会損失になることは本末転送ではあるが、できれば本当に興味を持ってくれる人に確実に資料を届けたいところである。そういう意味でも有効に活用できる「撒きビラ」を作り、展示会用販促ツールにメリハリを持たせて準備したいところだ。

≫どのくらいの数の展示会用販促ツールを準備したらいいか

「撒きビラ」をブース担当者が2人で30秒間に一枚ずつ来場者に配るとする。つまり、1時間に120枚、ふたりで配れば240枚になる。展示会の開催時間が9時から5時までとすれば240枚×8時間で1,920枚(およそ2,000枚)、会期4日間の展示会であればおよそ8,000枚の「撒きビラ」を準備するとよい。(ビラの配布を2人で行う場合)

これはあくまでひとつの目安であるが、準備の基準として参考にさせていただきたい。もちろん、展示会によって、出展する製品によって、出展の目的や来場者が展示会を訪れる目的によっても異なる。繰り返しになるが、あくまでも参考として準備の目安にさせていただきたい。

「撒きビラ」はおよそ8,000枚、製品カタログやパンフレットはおよそその10分の1、セールスキットはさらにその10分の1を目安とする。実践講座ではセールスキットは80~100セット程度準備すれば十分とアドバイスしている。(もちろんこれもあくまでもひとつ目安として参考まで)

5. 製品の並べ方、製品展示のノウハウ

≫製品展示の基本法則

最後に出展製品を並べるときの基本法則につい



写真16 「屋台出店型」レイアウトの事例。残念ながら奥のパネルは文字が小さくて見えない。展示台が低い、展示品を並べすぎ、ブースの中に誘導するには間口が狭い etc. 改善のポイントが多い



写真17 「Y字型」レイアウトの事例。奥の壁面のキャッチ用のポスターが効果的。壁を黒のカットシートで装飾している。シンプルで注目を集めるブースの使い方の事例。

で紹介したい。しかし、これもあくまでも基本法則であって、どんな製品を出展するか、ブースレイアウトを「スクリーン型」、「Y字型」、「屋台出店型」のどのタイプにするか、出展の目的や来場者が展示会を訪れる目的によっても違ってくる。あくまでも参考としてご覧いただきたい。

◇製品展示の基本三原則

- ・小さいモノは左、大きいモノは右が原則
- ・同様に大きいモノは下、小さいモノは上が原則
- ・色彩の明るいモノは左から右へが原則

これはコンビニやアパレルショップで商品を陳列する際の基本原則である。また、見た目の高さをそろえる、重ねない、置き過ぎないといった点も必要に応じて気を配ることも大切である。見た目に凸凹させないためには、POPの作り方やPOPを置く位置を工夫するとよい。

≫ちょっとした工夫が大きな効果を生む

◇製品展示の応用ポイント×6

- ・注目させたいモノは展示台中央でスペースを広く
- ・注目させたいモノにピンスポットを当てる

- ・展示台をクロスやフェルトで演出
- ・手の取りやすい位置に製品を並べる
- ・複数の製品出展はカテゴリーごとに分類
- ・カタログスタンドを有効活用

これは自分自身の経験から、ちょっとした工夫で製品を注目させるテクニックである。製品は来場者に実際に触れさせることが大切。展示台の高さを工夫したり棚を上手く活用することで手に取りやすい位置に置くこと、手に取って見てもらえるような工夫、見た後で元の位置に戻しやすい工夫をしたい。

また、カタログスタンドに会社の「強み」PRシートや製品ごとの「強み」PRシートを並べて、来場者が手に取りやすい位置に販促ツールを置く。担当者の自己紹介用のPRシートを作り、カタログスタンドに並べておいて名刺代わりに配るのも効果的。この方法を実践し、問い合わせ件数を増やしたという事例もあった。

今回は「強み」PRシートについて、事例を紹介しながらその作成方法と活用術について紹介する。

「人形劇をととした文化交流」実践報告

—愛知教育大学子ども向け人形劇サークル〈じゃんけんぽん〉の活動から—

愛知教育大学構師 生寫亜樹子

中川唯・村松良衣・田中光・加藤美有・佐藤沙悠美・鈴木千晴・鈴置実由・大澤佑子・
稲熊望畝・今枝春菜・小林陽子・福岡在菜・福岡弓佳・原江美子・栗木彩加・
宮地結実子・成田健之助（以上、愛知教育大学学生・OB）



はじめに

愛知教育大学子ども向け人形劇サークル〈じゃんけんぽん〉は、2013年度の交流協会文化交流助成により、初めての海外公演を行う機会をいただいた。日ごろ、大学近隣の小学校や幼稚園・保育所、子ども会等を中心に活動を行っている〈じゃんけんぽん〉にとって、国を超え、言葉の違いを超えて人形劇を上演することは大きな挑戦であった。

初めての海外公演の機会を下さった交流協会、公演先である国立臺灣師範大學、国立台北教育大學、臺北市立幸安國小の皆様をはじめ、公演にかかわってくださった全ての方々から感謝したい。人形劇をととした今回の交流の試みが、台湾と日本をつなぐささやかなきっかけのひとつとなり、今後の継続した交流のはじまりとなることを願っている。

I じゃんけんぽん台湾公演レポート

1. 台湾へ出発！初めての飛行機、初めての海外
集合は中部国際空港 7時 55分。学生 13名のうち 11名が、この公演のために初めてのパスポートを取得した。地理的に「日本の“ど”まん中」にある愛知ならではの、初海外の学生のうち多くが今回初めての飛行機体験とのこと。期待と緊張半ばの表情の学生たちは、搭乗手続きとセキュリティチェックを無事に終えた。

搭乗当日にたどり着くまでのエピソードをひとつ紹介したい。劇で登場する人形たちは全部、学生が心をこめて手づくりしているのだが、学生の人形たちへの思い入れは相当たるものである。聞くところによると、製作者（演者）に「人形がだんだん似てくる」のだという。さて、今回の旅に至るまでの最初の難関が、大道具小道具と人形を、どう運搬するのかという問題であった。50キロ



国立臺灣師範大學、臺北教育大学にて、ご協力ご参加いただいた教職員・学生の皆さんと。

じゃんけんぽん台湾公演日程および演目

◇公演日程

3月17日（月）

中部国際空港より台湾・桃園国際空港へ到着後、国立臺灣師範大學にて設営および練習。

3月18日（火）

午前：国立臺灣師範大學公演（於 綜合大樓・表演廳）

3月19日（水）

午前：臺北市立幸安國小公演

午後：国立臺北教育大學公演（於 北師美術館 MonTUE）

3月20日（木）

交流協会、故宮博物館で研修後、帰国。

◇演目（各25分）

①マヨケチャの冒険 ②スプーンちゃんのおんがくたい

を超える鉄製の舞台を海外まで持って行くことができるのか？デリケートなつくりの愛着ある人形を、預け荷物ではなく機内持ち込みにすることができるのか？学生たちは、事前に航空会社や警備会社へ何度も連絡を取り、舞台装置を梱包し、大事な人形の持ち込みについては、手足を動かすためのピアノ線が60cm未満であれば危険物とみなされず、機内持ち込みできることを調べることができた。初めての体験にともなう大きな課題を、入念な準備のもとたくましく越えた出発当日。学生たちは大切な人形をしっかりと抱いて、CI151便に乗り込んだ。そして、初めての台湾へ—。

これまで研究のために訪れてきた台湾が、じゃんけんぽんにとって初めての海外公演の場となることを嬉しく思った。私がひとりで歩いた台湾、私にとって特別な場所となりつつある台湾で、学生たちはどんな感動や発見と出会うのだろう。

（生嶌亜樹子）

2. 驚きの連続の台湾の街なみと夜市 —台湾に到着—

初めての海外旅行だった私は、台湾のこともほとんど何も知らない状態だったため、台湾についてから驚くことがたくさんあった。



中部国際空港にて、緊張の面持ちで集合。



台湾に到着！空港からの移動のバスの中で。

台湾の街につき、まず驚いたことは交通量の多さである。特にたくさんのバイクが広い道路いっぱいに並んで信号待ちしている様子は、日本では決して見ることのできない光景で、バイクが普及している台湾ならではの印象的であった。また、日本にもある店が多くあったのも印象的である。サイゼリヤや吉野家などの飲食店のほかに、セブンイレブンやファミリーマートなどの日本でなじみのあるコンビニエンスストアもいたるところで目にすることができ、日本の文化がとても浸透しているのだということを感じることができた。

私たちが今回の台湾公演で楽しみにしていたことの1つに夜市散策がある。台湾は夜市がさかんで夜が長いと伺い、田舎暮らしで夜出歩くことがほとんどない私は夜市に行くことをとても楽しみにしていた。夜市は人がとても多く、にぎやかで活気があり想像以上で本当に驚いた。50嵐というタピオカミルクティーの店やマンゴーかき氷、チーズケーキの美味しいカフェなどたくさんの物を食べたが、1番印象に残った食べ物は猪血糕という食べ物である。スパイシーで日本には無い味付けだった。台湾にしかない食べ物を食べることができて、とてもいい思い出になった。台湾は独自の文化に日本の文化が融合したとても素敵なお店だと感じた。

(中川唯)



師大夜市で台湾の文化にふれる。

3. じゃんけんぼんの人形劇が初めて海をこえた日 — 国立台湾師範大學公演(1) —

今になって台湾公演を振り返ったときに私が最も鮮明に覚えているのは、なんと言っても海外初となる国立台湾師範大學での公演である。私は日本の食文化の紹介となる劇「マヨケチャの冒険」の主人公ケチャップ役を務め、さらに台湾で公演するにあたり観客への簡単な問いかけは中国語で言おう!ということになり、ますますプレッシャーを感じながら公演初日を迎えた。その日は開演の2時間前から準備が始まり、キャストは現地の学生より最終的な中国語の発音レッスンを受けた。自分たちの発音で果たして台湾の子どもたちに伝わるのだろうか? 不安な思いを抱いたまま、ついに海外での初公演の幕が上がった。劇が始まる直前の緊張は、まるで初めて役がもらえて演じることになった1年生のときのように久しぶりのものだった。けれども、私たちの劇のテンポに子どもたちがのってきて大きな声の反応が返ってくると、だんだんと緊張よりも楽しさや喜びを感じられるようになってきたのだ。無事に劇を終えたあと、舞台の隙間から観客席の子どもたちの劇を楽しんでいる様子を見ると自然にうれし涙がこぼれてきたのだった。海外の子どもたちにも私たちの劇の楽しさを伝えられたと実感した国立臺灣師範大學での公演が、私たちの大きな自信へと



師大夜市で台湾伝統の猪血糕に挑戦。

つながったということは間違いなだろう。この貴重な経験を生かし、これからも国内外を問わず大学サークルとして楽しい人形劇を届ける活動を続けていきたい。

(村松良衣)

4. 初めての台湾公演、ギリギリまでの戦い — 国立台湾師範大學公演(2) —

初めての海外公演、もちろん言語や文化の違いによる不安もあったが、初めに私の前に出てきた障害は、けこみ(人形劇用の舞台)の設置の仕方についてだった。中国語の字幕をパワーポイントで流すため、スクリーンの場所と兼ね合わせなければならない。また、客席により人形の向きが極端に変わるため丁度良い位置を探し、何度も舞台と客席を往復し微調整を繰り返す。けこみを建ててからは、各自練習へと移った。しかし、音量調整が上手くいかないという、新たな問題点が浮かび上がってきた。今回BGMは大学の放送機器を借りることになっていたが、スピーカーの位置や、音の微調整の難しさが、どうしても人形の声とのバランスが取りにくいのである。これも大学の人に無理を頼みながら、なんとか落とし所を見つけていた。

一日目、二日目と準備をする時間は充分あったが、それでもギリギリまで練習と微調整を繰り返

し、始まる直前もまだやらねばならぬ事があるのではとそわそわしていた。

しかし始まってしまえば、私は「ああ、何とかなるもんだな」と正直思った。子どもの歓声や笑い声を聞くうちに、今までの「無言の中進むことになったらどうしよう」という不安はいくらか落ち着いて、どこに行っても子どもの反応は一緒なんだ、という事実がストーンと胸の内に落ちてきた。失敗もなく、「マヨケチャの冒険」も「スプーンちゃんのおんがくたい」も終わる事ができ、嬉しいよりは、安堵の方が強かった。

(田中 光)

5. 子どもたちの笑顔の力 — 臺北市立幸安國小公演(1) —

この日の公演開始時間は8時15分。日本でもこんな朝早くから公演をした経験はない。不安でいっぱいの中現地入り。準備に取り掛かる。てきぱきと進めるなかでも、メンバーの笑い声が部屋に響く。この時間も私は大好きだ。この雰囲気、本番の緊張を和らげてくれるように感じる。子どもたちが入室してくると緊張感が一気に高まる。子どもの楽しそうな話声を聞くと気合が入る。まず始めに様々な調味料の紹介。人形が顔を出すと子どもたちが歓声を上げた。劇に向け、盛り上がりは最高潮に。そして「マヨケチャの冒険」



台湾到着の感動を味わう間もなく、真剣に練習する学生たち。



学生たちにアドバイスする師範大学大学院生の伊藤健さん(写真左)。



最初の演目「マヨケチャの冒険」。中国語で子どもたちに問いかける。

の始まり。中国語での問いかけに元気に答えたり、人形や料理に楽しそうな反応を見せたりする子どもたち。私たちも楽しんで演じられた。メンバーの自己紹介で公演は終了。子どもからの日本語でのお礼の言葉を受け、成功したことへの安心感と、子どもや先生方への感謝の気持ちでいっぱいになった。記念写真を撮り、子どもが退室する時、人形とのふれあいとともにじゃんけんぽんから子どもたちへ手紙と折り紙（ぴよんぴよんカエル）のプレゼントを手渡した。前日の夜、眠気を押し殺してみんなで作ったものだ。笑顔で教室を後にする子どもたちを見ていると幸せな気持ちになる。子どもの笑顔の力は本当にすごい、と改めて感じた。その後、片付けと写真撮影。子どもが描いたきれいなポスターは、じゃんけんぽんの宝物となった。幸安國小での公演は、じゃんけんぽんの今後の活動につながる貴重な経験となった。

（加藤美有）

6. 思いを伝えるということ 一 臺北市立幸安國小公演（2）一

二回目の公演会場は臺北市立幸安國小。「ようこそ幸安小学校へ」とかかれた手作りポスターで出迎えてくれた。思ったよりも子どもたちとの距離が近く、一人ひとりの顔も見ることができた。劇を待つ様子は日本の子どもたちと変わらないと



初日の公演後のインタビュー、安堵の表情のチーフ田中光さん（写真中央）。

感じた。そわそわ、わくわく、たくさんの笑い声……。そして始まった公演。「你們 喜歡 美乃滋 嗎？」と私が尋ねると、こどもたちから「喜歡！」と声が飛ぶ。嬉しい。こんなに優しい異国のこどもたちに最高の舞台を見せたいとがむしゃらに演じた。上演後、こどもたちが「オネイサン オネイサンアリガトゴザイマシタ」と日本語でお礼の言葉を述べてくれた。まさか日本語でお礼と言われるなんて思ってもみなかったから、とても心を打たれた。私は「マヨケチャの冒険」でマヨネーズ役として中国語に挑戦していた。しかし、声調をはじめとして発音が難しく、通じているのだろうか、へたな中国語で劇をするのはむしろ失礼なのではないか、などと心配していた。しかし、一生懸命に私たちの国の言葉で感謝の意を伝えようとするこどもたちの姿を見て、それは杞憂であったと感じた。もちろん上手に言語を操れたら、それに越したことはない。しかし、人の心を打つのは素晴らしい言語能力ではなく、必死に思いを伝えようとする姿なのだ。言語は思いを伝える手段に過ぎない。そのことを私は幸安國小の子たちから学んだ。私はそうして最後の臺北教育大學での公演に向けて、思いを新たにしたのであった。

（佐藤沙悠美）

7. 最後の公演に、思いをこめて ―国立臺北教育大學公演（1）―

この日は、臺北市立幸安國小での公演をした後に、猫空で観光をしてきた。一つ公演をやり終えて、ほっとした気持ちで、初めての猫空を思い切り楽しんできた私たちは、再び気合を入れなおした。この臺北教育大學での公演が、今回の台湾公演の最後の公演であった。今までに二回公演をやってきた。反省点はたくさんあるが、それでもかなり手ごたえを感じていた。今回も自分たちで納得のいく劇を届けたい。満足のいく公演で今回の台湾公演を締めくくりたい。公演の時間が近づくとつれて、メンバーの緊張は高まっていった。お客さんは、子ども、学生、お年寄りとたくさんの方が集まってくれていた。私は二本目の劇で字

幕操作の係りをしていたので、お客さんの様子を見ることが出来たが、みんな人形に集中して見てくれていた。笑ってもらいたいポイントでみんなが反応して笑ってくれていたときは、私たちの劇が台湾の人に伝わっていることを実感して嬉しかった。私たちは満足のいく公演で今回の台湾公演を締めくくることが出来た。一本目の「マヨケチャの冒険」が終わったとき、主役を演じていた二年生の学生は汗をびしょりかいていた。二年生にとって、「マヨケチャの冒険」を演じる機会はこれが最後ということになっていた。特別強い想いで劇に臨んでいた。大好きな「マヨケチャの冒険」を最後にあのような場でやらせてもらえたことに、ただただ感謝である。

（鈴木千晴）



手づくりのポスターに出迎えられた幸安國小。



朝早くからの公演直前、発声練習をするメンバー。



2年生、3クラスの子どもたちを前に。



上演の後、教室を退場する子どもたちと交流。

8. 台湾の人たちと交わした「こんばんは」 — 国立台北教育大學公演（2） —

三日目の夜には、臺北教育大學で公演を行った。大学にある美術館内の会場に舞台を立て、白い壁に中国語と日本語の字幕を映すといった、普段の日本での公演とは異なる環境での公演に、小さな子どもから大人まで幅広い年齢層のお客さんが足を運んでくださった。

臺北教育大學では二つの人形劇を上演した。一つ目の「マヨケチャの冒険」は日本語に所々中国語を交えて、また二つ目の「スプーンちゃんのおんがくたい」は全て日本語で劇を行った。私は「スプーンちゃんのおんがくたい」で、主人公のスプーンちゃんを演じた。登場シーンで「こんばんは」と挨拶をするのだが、台湾の人々にも「こんばんは」と返していただけたのがとても嬉しかった。劇中に出てくる「可愛い」という台詞に反応してくれたり、色々な場面で笑ってくれた。公演終了後には多くの方が人形と写真を撮ってくださり、また、「出演成功」と書かれたとても立派なお花もいただいた。

「スプーンちゃんのおんがくたい」は全て日本語で劇を行うということだったので、公演が始まるまでは「全く反応がなくてシーンとしてしまったらどうしよう…」とずっと心配していたが、日本と同じように台湾の人々にも楽しんでいただけ

て、本当に良かったと思う。初めてで慣れないことも多くあったが、無事成功に終わることができた今回の台湾公演は、私にとって貴重な経験になった。

（鈴置実由）

9. 留学経験を発揮できた喜び —台湾の言葉—

私は約一年間、中国の東北部に留学していた。中国語が少し話せることもあり、今回初海外公演で台湾の人々と交流できることを心待ちにしていた。

多くの人を知っているとおり、中国大陆で話される「中国語」と台湾で話される「中国語」には違いがある。私がこれまで学習してきたのは、前者である。初の台湾公演、私は中国語での司会を担当することになった。自分の中国語がきちんと伝わるのか、台湾の人たちの反応はどうか、すべてが初めてで期待と不安が混ざり合った。そんな中、ついに「剪刀石頭布！！」と紹介される声が聞こえた。マイクを握りしめ、舞台に出て元気に挨拶。

・・・通じた！公演も無事に終わった。もちろん、まだまだぺらぺらに中国語を話せはしないが、観に来てくれた人がちゃんと反応を返してくれた。また、移動のタクシーや買い物をするときにも現地の人と会話することができた。言葉の通じ



「スプーンちゃんのおんがくたい」の一場面。



台湾最後の公演の名残を惜しんで続いた子どもたちとのふれあい。

る喜びを感じることができた。この喜びは、これからは中国語を学ぶ上での大きな糧となるだろう。

今回の台湾での公演は、私にとって貴重な経験となった。また中国語が通じるという自信にもなった。現在私は、教員を目指している。中国語が母国語の児童生徒がいたら、私の中国語を積極的に活かして支援して行こうと思う。

(大澤佑子)

10. 初めての台湾、現地で「発見」する楽しさ —台湾の食文化—

じゃんけんぽん、台湾公演の演目のうち、「マヨケチャ」はマヨネーズとケチャップが主役の、調味料の世界のお話である。せっかくの海外での公演、この作品と絡めて調味料のを中心に日本の食文化も紹介しよう、と準備を進めていた。こちらの文化を紹介するのであれば、あちらの文化についてもある程度知らなくては差異などの説明ができない。準備を進めている中で、実際に何度も台湾を訪れている先生から写真などで、台湾の飲食店やコンビニ、スーパーに売られている食品を見せてもらっていた。現地から送られてきた、コンビニやスーパーの写真を一見すると、日本のそういった店の様子とたいした違いはないようにみえた。確かによく似ていたのだが、実際に行って、自分の目で見てみると、また印象も違って来る。私が受けたのは、「商品が大きい」という印象だった。なにもすべてが大きかったわけではないが、飲み物や食品の袋、缶など、日本で見るとよりも大きなものが多い。日本の商品も多い、など事前に知り得た情報よりも実際に見て思ったことが強く印象に残った。

旅行中の自分たちの食事についてとにかく色々なものを食べたと思う。レストランでももちろん、台湾の料理をおいしく、楽しめた。夜市では特に自分たちの知らないものを食べる経験もでき

たし、中国茶は飲むだけでなく買い物も楽しんだ。楽しい思い出であると同時に、様々なことを知る経験でもあった。

(稲熊望畝)

11. 日本の伝統・日本の流行 —台湾の中の日本文化—

私は今回の公演で初めて海外へ行った。そこで出会った日本文化について述べようと思う。今回私たちは、日本の調味料・料理を題材にした人形劇を上演した。私は司会をやっていたのだが、そこでは劇に出てくる日本料理の簡単な説明もする。小学校で行った公演でも日本料理紹介をしたのだが、すでにその料理のことを知っている子供たちが多く、とても驚いた。やはり日本と台湾は同じアジア圏で似通っている部分もあるのだなと思った。そして、台湾で出会った人々は親日の方が多く、日本に興味を持ってきているのだと、うれしく思った。

また、街中にはファミリーマートやセブンイレブンといった日本のコンビニが多くあった。台湾の商品と並んで日本のスナック菓子も多く陳列されており、古くからの文化だけでなく、最近の文化も台湾に輸出されていた。よく、「世界中で大人気!」といわれているハローキティだが、日本にいたときには、本当にそうなのか疑っていた部分もあった。しかし、台北の Gondola などでハローキティのものがあがり、食べ物だけでなくキャラクターといったものでも日本の文化は海外へ進出しているのだと感じた。伝統的な日本文化だけでなく、スナック菓子やキャラクターといった現代日本の文化も台湾で広まっているということ、とても誇りに思う。

(今枝春菜)

12. わたしが出会った台湾の人々

今回の台湾公演で、わたしたちは多くの人と出

会い、お世話になった。公演先の方々だけでなく、台湾で立ち寄ったお店の人たちも私たちに好意的に接してくれた。中でも、私が印象に残っているのは、とあるカフェの店員さんとの出来事だ。

私は自由行動の時間に、同級のメンバーと一緒に先生に教えてもらったカフェに行くことにした。私たちは、第二外国語で中国語を専攻している子もいたが、実際に中国語を話せない。台湾の、特に若い人たちは英語が堪能であると聞いていたので、「まあ、英語が通じるなら大丈夫でしょ」といって出かけた。店に着いて、店員さんに英語で、「6名ですが、いいですか?」と聞いたが、あまりうまく通じず、お互いあたふたしてしまった。すると、近くにいた地元の人と思われる女性たちが、うまく通訳してくれたのだ。その女性たちのおかげで、無事に注文をすることもでき、おいしいケーキを食べることができた。最後には、英語であったが、店員さんともちゃんとコミュニケーションをとることができた。

台湾公演でたくさんの人と関わることができたが、私たちの多くは中国語がほとんど話せないので、コミュニケーションがとれなかったり、通訳の方を介しての会話が多かった。次の機会があれば、中国語を覚えて、中国語で台湾の人たちと話せたら、と思う。

(小林陽子)



猫空の茶芸館にて。

13. 先人たちの作品に、時を経て向き合う —故宮博物館の見学—

私たちが最終日訪れたのは故宮博物館である。いかにも中華風の外観であった。到着したとき天気は少し悪く雨が降りそうであった。ここに入る前に我々は入り口付近で、全員で記念撮影を行った。主要な観光地であるのか、中は人でいっぱいだった。いくつかのツアー団体があり、日本人の団体も見かけた。チケットの購入方法で少し時間をとったものの、なんとか全員入場できた。

それぞれの展示はとても心惹かれるものばかりだった。書道家の作品の展示、中国の貴族が使っていた家具の展示、古代の遺物の展示などだ。数ある展示物の中でも、特に人気があったのが、清の時代に作られた翡翠の白菜である。白菜の展示は三階にあるのだが、これを見るために三階へ上がる階段あたりから人が並んでいるほどだった。実際に見てみると、とても精巧な作りで美しいものであった。

見学時間は二時間程度というとても短いものであったが、なんとか全部の展示を見ることができた。展示物の説明は中国語で書かれていたため、ほとんど理解でなかなかったが、先人たちの手にあったものを多くの時を経て自分が見ていることに感動した。

(福岡在菜)



珍しいデザートの中でも特に皆の注目を集めた「亀ゼリー」。

14. 想いの詰まったメッセージカード —交流協会台北事務所—

台湾公演最終日である2014年3月20日、私たちは交流協会台北事務所を訪れた。ここにはいったい何があるのか、そう思って待合室に入った私の目に飛び込んできたのは壁いっぱいに表示されたメッセージカードであった。台湾の人々が東日本大震災で被災した人々にあてて書いた応援メッセージが掲示されていたのである。大きな紙に何人もの人が書いたと思われるものや、小さなカードが貼られたものなど、形状や内容はバラバラだが、何百、何千ものメッセージがそこにあったのである。

まず初めに目に留まった寄せ書きを見てみると、そこには台湾の国旗と日本の国旗が描かれていて、そこに大きく「加油」（『頑張れ』の意）の文字が書かれていた。そしてその周りにおそらく小学生が書いたと思われるかわいらしい文字でたくさんの言葉やイラストが描かれていたのである。中国語で書かれていたため何が書いてあったかわからないものもあったが、どのメッセージにも日本が元気になってほしいという願いが込められているように感じ、私は胸が熱くなった。この寄せ書き以外にも、幼稚園児から大人まで、本当にたくさんの人々からメッセージが寄せられていて、いろいろな人に支えられ今の日本があるのだと実感した。



故宮博物館にて、人形も一緒に記念撮影。

台湾の人々の想いを私は決して忘れない。本当に、本当にありがとう！謝謝台湾！！

(福岡弓佳)

II 〈じゃんけんぼん〉の活動紹介

愛知教育大学子ども向け人形劇サークル〈じゃんけんぼん〉は、主に幼稚園・保育園の子どもや小学生を対象に、手作りの脚本や人形で、年間約30回の公演を行っているボランティアサークルである。活動日は週に2回。脚本について話し合ったり、人形や小道具などの制作をしたり、上演中の劇の練習をしたりする。

さて、じゃんけんぼんの主となる活動は、やはり「人形劇の上演」である。そこで、普段の公演がどのようなものであるかを述べていこう。公演先の施設に上演1時間前に到着。舞台の組み立てや発声練習を行う。観客の子どもたちが入場したら、いよいよ上演開始だ。基本的には、2本の劇を上演する。いずれもメンバーたちが一生懸命考え、何度かの話し合いの末に出来上がった手づくりの脚本である。人形や小道具は約2か月かけて作った力作だ。公演に向けて日々練習してきた成果の見せ所である。観客の子どもたちが人形の呼びかけに応じてくれたり、笑いが起きたりすると、本当にうれしさを感じる。2本の劇の間には、子どもたちと簡単なゲームで遊ぶ。公演が終われば



海を越え台湾の子どもと楽しんだ「マヨケチャ」の決めポーズを故宮でも。



東日本大震災への支援メッセージに見入る学生たち。充実した4日間の日程を終え、帰国の途についた。



反省会。公演先の方に感想やアドバイス等をいただき、次に生かす。これが主な公演の内容である。

3月の初旬には「むすび座合宿」が一泊二日で行われる。愛知県内の人形劇のサークルが集まって行われる合宿で、私たちも毎年参加している。この合宿は、名古屋市のプロの人形劇団「むすび座」さんで行われる。合宿では実際の上演を見せていただいた。舞台裏を見ることができ、とても勉強になった。また、他の大学の人形劇を見て、私たちとは違った人形の作り方や、人形の演じ方から多くの勉強をした。合宿ということで、夜のイベントのお楽しみでは、大学ごとに色々な具材を持ち寄っての鍋パーティー、他大学の人も話す機会があった。また、サークルごとの出し物では推理クイズを担当、私たちも一人一人役をもって、楽しく演じながら盛り上げることができたと思う。

〈じゃんけんぽん〉には、2年生6名、1年生8名の学生が所属している（2013年度）。人形劇の経験の有無、裁縫の得意不得意などは問わず、興味のある者は歓迎というアットホームなサークルとして展開している。本サークルではメンバー同士の親しみやすさ、また子供達にも親しみやすくなるように、一人ひとりサークルネームと呼ばれるニックネームがつけられており、サークル内ではサークルネームで名前を呼び合っている。サークルネームは学年ごとにテーマが決められてお

り、2年生は調味料、1年生は寿司がテーマになっている。

今回の台湾公演には顧問として2名の先生に引率していただき、2年生5名、1年生6名、そして引退した3.4年生1名ずつが参加した。

（原江美子・栗木彩加・宮地結実子）

Ⅲ 台湾公演の成果と課題

今回公演を実施した3会場では、のべ約350名の方に鑑賞いただいた。臺灣師範大學では、台湾人や日本人の大学生、教職員の方々に加えて公館キャンパス近隣の臺北市立萬福國小の1学年3クラスの子どもたちと先生方、臺北市立幸安國小では、2学年3クラスの子どもたちと先生、保護者の方、臺北教育大學では、幼児教育専攻を中心とする大学生、教職員の方々にあわせて、夕方からの公演にもかかわらず、多くの親子連れの方が人形劇の公演のために集まってくださった。学生によるレポートのとおり、各公演先ではとてもあたたかな雰囲気の中で上演を終え、文化や言葉の違いを超えて、人形劇をとおして交流するという今回のねらいを十分達成することができたと思える。

以下、今回の公演において特にポイントとなった点についてふれたい。

第一は、劇の題材を工夫した点である。今回の

公演では、食文化の違いを楽しむ「マヨケチャの冒険」、音の世界を楽しむ「すぷーんちゃんのおんがくたい」の2公演、文化や言葉の違いそのものを楽しむ題材と、それらを問わず楽しめる題材とを上演した。

第二は、中国語と日本語の二か国語で上演したこと、第三は、現地大学生の協力により、台湾で一般的に使用されている表現にできるだけ近い標準正体字による字幕を準備し、人形劇の上演と同時にスクリーンに投影したことである。二つの演目のうち一つについては、すべての中国語のセリフを音声で準備し、「上演をとおして台湾の人たちと交流したい」という願いのもと、呼びかけや問いかけの言葉を中心に、全体の約4割を中国語で上演するに至った。中国語の発音は学生たちにとって容易ではなかったが、発音の良し悪しではなく、言葉を超えて台湾の人たちと交流したいという学生たちの思いにより、会場の皆さんと人形劇の世界を楽しみながら台湾の文化と日本の文化の違いや共通点を体験的に知る、貴重な機会となった。海外の子どもたちと交流する体験は、教師を目指す学生たちにとって大いに意義ある活動でもある。

今回の人形劇公演を交流の契機として、私たちが次に目指したいのは交流の継続である。有難いことに今回の公演では多くの方が、日本の子ども文化としての人形劇に興味を持って下さり、再度の公演を期待する励ましの声をいただいた。第二回のじゃんけんぽん台湾公演、そして台湾の人形劇の日本公演の実現を、私たちの次なる目標としたい。

(生寫亜樹子)

おわりに

初の海外公演となる台湾公演が終わった。学生達は、台湾の文化や習慣に直接触れ、現地の人々と直接触れ合うことによって、異文化理解が進むことを体感することができた。そして、子ども達

に対して働きかけたこと、子ども達の反応を受け止めたことは、授業での大切なスキルにつながるだろう。これから教師をめざす学生にとって、文化や言葉が異なる子ども達と交流することにより、コミュニケーションの原点を学べたことは、大きな収穫であった。

公演前の学生達は、台湾の子ども達に日本の人形劇が伝わるかという不安でいっぱいであった。初公演の前日は、消灯時間いっぱいまで、中国語の台詞を検討したり、中国語の発音練習を続けたりしていた。当日の公演直前も、現地の学生から中国語発音レッスンを熱心に受けていた姿が鮮明に残っている。学生達が精一杯努力したことが、公演中に、中国語での問いかけに元気に答える子ども達の姿、劇中の人形や料理に楽しそうに反応する子ども達の姿につながり、感激のうれし涙となって表れた。

私は、じゃんけんぽん OB として、また愛知教育大学で後輩達を指導する教員の一人として、この台湾公演に同行できたことを大変幸せに感じている。改めて、交流協会、公演先である国立臺灣師範大學、国立台北教育大學、臺北市立幸安國小の皆様、そして愛知教育大学をはじめ公演にかかわってくださった全ての方々から心から感謝したい。そしてこれを契機として、この交流が継続することを強く望んでいる。

(成田健之介)

[お問い合わせ先]

愛知教育大学 子ども向け人形劇サークル
じゃんけんぽん
448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢
愛知教育大学
連絡先(顧問教員)
学校教育講座 講師 生寫亜樹子
shojima@aecc.aichi-edu.ac.jp

編集後記

このたび台湾台南市の烏山頭ダムを訪問する機会を得ました。

「交流」をお読みいただいている皆様には今さら何をとられるかもしれませんが、このダムは台湾南部で1930年に完成し、広大な範囲で洪水、干ばつ、塩害等を減らすことに大きく寄与したものであり、現在でもそれは変わりません。湖と見まがうばかりに巨大で、それでいて静謐さと荘厳さを感じさせる風景に、私はしばし時間が経つのも忘れて見入ってしまいました。

その風景もさることながら、この話を語る上で欠かせないのは、このダムの計画を策定し完成まで指揮した日本人技術者の八田與一氏の存在です。ダムに併設されている八田與一記念館では、ダムの完成から80年余りを経た現代においても中学生向け教科書に業績が紹介され、台湾の多くの方に深く敬愛されているという話を伺い、私は日本人として嬉しく、誇らしく、また、台湾の方が日本にとっても友好的であることの一端は八田與一氏の業績によるものだろうとの思いを強めました。

残念ながら日本国内では八田與一氏の知名度はそれほど高くはないと感じています。微力ながら、個人的に親族、知人、友人にその業績を伝え広めていきたいと思ひます。 (S.W)

交流 2014年5月 vol.878

平成26年5月26日 発行

編集・発行人 小松道彦

発行所 郵便番号 106-0032

東京都港区六本木3丁目16番33号
青葉六本木ビル7階

公益財団法人 交流協会 総務部

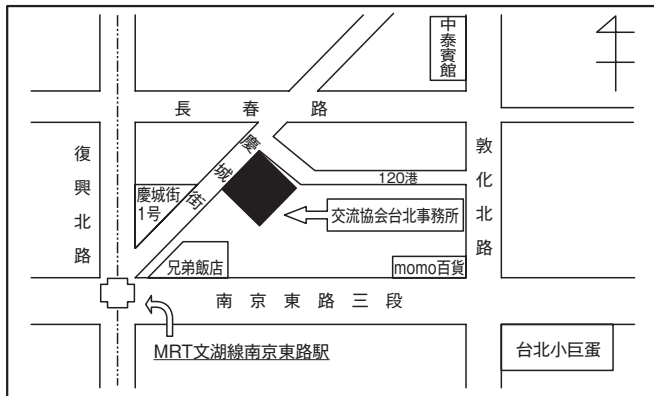
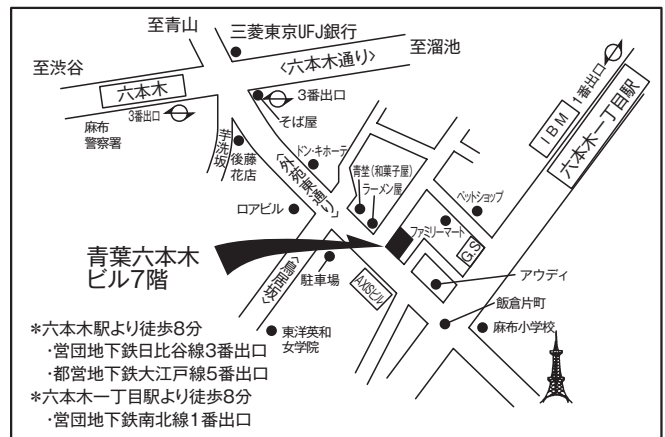
電話 (03) 5573-2600

FAX (03) 5573-2601

URL <http://www.koryu.or.jp>

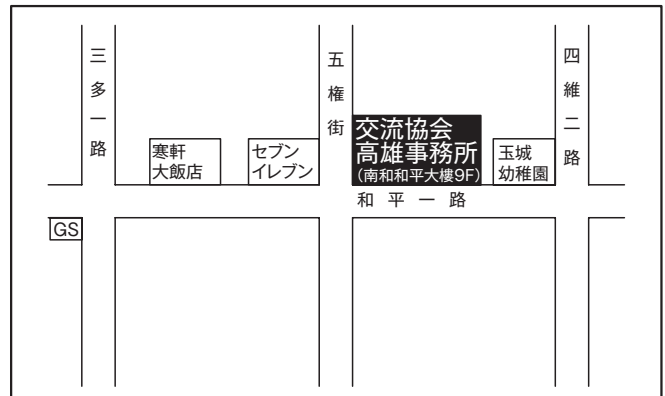
表紙デザイン：株式会社 丸井工文社

印刷所：株式会社 丸井工文社



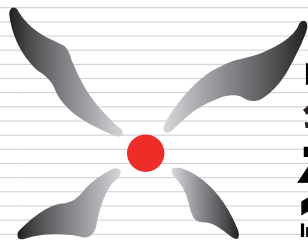
台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓
Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei
電話 (886) 2-2713-8000
FAX (886) 2-2713-8787

URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87號
南和和平大樓9F
9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan
電話 (886) 7-771-4008 (代)
FAX (886) 2-771-2734

URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top



日本と台湾との架け橋

公益財団法人

交流協会

Interchange Association, Japan (IAJ)

